２０１９年１２月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２０年度国内放送番組編集の基本計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、ウワサの保護者会「児童相談所～子どもの一時保護～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
石堂　真弘（全国農業協同組合中央会常務理事）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)特別理事）
尾上　　紫（日本舞踊家、女優）
木村たま代（主婦連合会消費者事務局長）
栗原　　友（料理家）
國土　典宏（国立国際医療研究センター理事長）
柴田　　岳（読売新聞東京本社常務取締役論説委員長）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜２０２０年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～諮問～＞

○　編集の重点事項の２に「医療や介護をはじめとする社会保障のあり方など」とあ

る。年金もこれからの時代に重要なテーマのひとつだと思われるので、入れたほうがよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

ご指摘いただいた内容を踏まえ、検討させていただく。

○　各委員の意見を反映し、今回の原案はできている。原案に沿って番組編成が行われるという前提で今回の原案を可とし、答申したいと思う。異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

○　答申いただき感謝申し上げる。中央放送番組審議会の答申をいただいたので、経営委員会に今回の「２０２０年度国内放送番組編集の基本計画」を提出し、そこで議決を得たい。来年度の具体的な番組編成を記した編成計画、時刻表、番組の内容については改めて２月に予定している審議会で報告させていただく。

＜ウワサの保護者会「児童相談所～子どもの一時保護～」

（Ｅテレ　１１月３０日(土)放送）について＞

○　誰もが依存先を探している時代だと感じた。子どもだけでなく、大人も困っているという印象で、弱者だけでなく皆がそういう状況に追い込まれているのが現代だと思った。多くの人に共通する問題であることを今後も伝えていってほしい。

○　番組で取り上げると、多くの人に児童相談所の実態を知ってもらうことができる。自分にとっても身近な問題だと感じた。今後もさまざまな視点で取り上げていってほしい。

○　虐待のニュースを見ると、なぜこんなことをするのだろうという思いにかられる。今回取り上げたケースは「服を脱ぎ捨てないで片づけなさい」、「部屋をきれいにしなさい」など、しつけの一環とも取れ、虐待としつけは紙一重だと感じた。しつけがエスカレートすると自分も当事者になる恐れがあるのではないかと考えさせられた。親が日々発していることばがすでに子どもを傷つけているというケースを取り上げていたので、多くの人が当事者意識を持って見られたのでないか。

虐待の原因は多数あり、育児ストレスに関連している場合が多いと思う。番組では、虐待の予防に向けた取り組みが具体的に示されており、よかった。児童相談所は子どもと引き離される怖い場所だと思わせない仕組みが重要だと感じた。番組で紹介されたようなＮＰＯ法人が全国にあるわけではないと思うので、育児ストレスを抱える人たちが相談できるような場所を番組でも伝えていくとよいのではないか。

○　児童相談所ということばは知っていても、何を行っているのか知らない人も多いと思う。今回の番組では、一時保護された経験のある子どもにインタビューを行っていた点が非常によかった。保護することを理由に、被害を受けている子どものほうが隔離されてしまうという問題もある。番組の後半で育児支援施設が紹介されていたことはよかったが、番組前半の父親の虐待行為からの保護の話とは質的に違うと思う。もう少し虐待問題の解決について切り込んで伝えてほしかった。また、子どもがどこかに連れていかれてしまうと思うと、親は相談に行かない。児童相談所の担うさまざまな役割を伝え、深めたほうがよかった。

（ＮＨＫ側）

番組の前半と後半のケースでは、子どもの年齢が異なり、視聴者に違和感を与えたかもしれない。親子を隔離することでは本当の解決にならないため、親子共に包括的に支援することが必要だということが伝わればよいと考えた。

○　子どもではなく、親を隔離する必要があるのではないかと思った。今回のように児童相談所の実態や育児支援施設の取り組みを丁寧に伝えることは重要だ。このような番組が、ＮＨＫに対する信頼を高めることにもなる。一時保護された子どもが学校にいられない理由を説明していたが、なぜ、教科書なども預かるのかという説明があるとよかった。一時保護された経験のある子どもの証言をよく引き出せていたと思う。話の内容も論理立てられていて、説得力があった。証言をした子どもと取材者との信頼関係を感じた。

○　１１月２３日(土)に放送された「もしものときの児童相談所」も見た。番組を見るまでは、児童相談所は対応が甘いというイメージを持っていた。子どもの立場から一時保護がどのように捉えられているのか、一時保護された子どもは、一時保護という言葉の印象とは異なり、隔離状態にあるということに驚いた。子どもの立場に立ち、精神的な面に寄り添うことが重要だ。子どもを隔離するかしないかではなく、適切なレベルで何か対応することはできないのかを深掘りするとよかった。こ

の種のテーマを扱うと、コミュニケーションが重要という結論に陥りがちだが、本当に困っている人は他者に助けを求めることができず、コミュニケーションが取れないから問題を抱えている。児童相談所がそのような人たちにとって、頼れる場所になるよう、社会で解決できる仕組みを整えていければよいと感じた。

○　この種のテーマは深掘りしていく必要はあるが、重いテーマで、避けてしまいがちだ。スタジオでは、意見交換や情報交換がしやすい雰囲気づくりを行っており、よい演出だった。母親が子どもを学校に連れていっても何も言われないが、たまに父親が連れていくと「立派なお父さん」になると言う話は、母親と父親の非対称性を感じた。そのことに甘んじている父親も多いだろう。育児の在り方についても考えさせられる番組だった。

○　児童相談所の実態について初めて知る情報もあり、興味深い内容だった。番組後半で、子どもを地域で守っていくという紹介がなされていたが、非常に重要なことだ。今後も、地域で守るためのよい事例があれば紹介してほしい。

○　一時保護された子どもから、なぜ教科書を預かるのか、私も疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

番組で紹介したように、児童相談所によっては、子どもどうしが連絡を取ることがないよう、教科書を渡さなかったり、プリントなどの紙類を回収したりしているところもある。隔離と思われるような保護のしかたについて、もう少し丁寧に説明するべきだったと思う。

○　２４分という放送時間ですべてを説明するのは難しく、疑問が残った。

○　社会問題を複数の番組と連動させ、さまざまな角度から掘り下げることはＮＨＫならではの報道のスタイルだと思う。保護された経験のある子どもに赤裸々に語ってもらうなど、取材力の確かさを感じた。予備知識がないと疑問をいろいろと感じる内容だったが、ほかの番組と多面的に連動しているので、そこで取り上げられているのかもしれないと思いながら見た。子どもの虐待は深刻な社会問題だ。今後も、ほかの番組と広く連動しながら掘り下げていってほしい。

○　子どもの立場から語っている番組は初めて見た。児童相談所の実態を知ることができて、大変よかった。同情するだけでなく、現状を知り対策を取っていくことが

重要で、我々がどう支援していくべきかを考えさせられた。経済的に貧しく、食べることも大変な子どもを援助することも大事だが、一見裕福な子どもでも、虐待などいろいろな問題があることをきちんと認識しなければいけない。後半の地域と連携したＮＰＯ法人の活動は共感できる部分が多かった。番組がこのような取り組みが広がることへの一助になるとよいと思う。

○　一時保護された経験のある子どもが心の内を率直に語っていて、スタジオでの専門家の解説や議論を通して、実態と課題がとても分かりやすく伝わる番組だった。一方で、一時保護された場合の児童相談所と学校との連携や復学に際しての学校の対応はどうなのか、また、復学後の教育現場から児童相談所への対応や児童相談所自体の課題について伝えてほしかった。育児支援施設の事例が取り上げられていたが、子育てに苦闘し、孤立した母親の姿を見て、反省する人たちもいたのではないか。ただ、番組前半に取り上げられた虐待の問題と明確に結びつかなかったので、流れに違和感があった。それぞれ別の形で取り上げたほうが分かりやすかったのではないか。また、教育現場の声も取り上げたほうが、より理解が進んだと思う。虐待の問題は大きな社会的な問題になっているので、引き続き取材、報道に努めてほしい。

○　とてもよい番組だった。育児の大変さを伝えながら、子どもの教育方法について家庭内で議論を喚起する内容だったのではないか。育児支援施設の紹介では、視聴者が自分で市区町村の施設を調べるよう案内していたが、追い詰められている人ほど調べる余裕はない。検索キーワードを示すなどすると親切だったのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

ニュースになるような虐待はごく一部で、ほかにも表に出てこない予備軍がいつ危険な状況になるかは分からない。その一歩手前で支えようというのが育児支援施設だ。虐待の問題を取り上げた番組を２月に集中編成する予定なので、さまざまな切り口で丁寧に伝えていきたい。

○　子どもの虐待のニュースでは児童相談所に不手際があったとする報道が多い中で、今回は成功例を紹介しており、感銘を受けた。子ども自身の精神面や健康面の問題に対して、どのように配慮しているのかといった点なども知りたいと思った。一時保護された経験のある子どもが自らの体験を話していたことには驚いた。実例を複数紹介するとさらに理解が深まったのではないか。

○　保護された子どもの問題は、隔離というよりも軟禁に近い状態で、義憤を感じた。必ずしも明らかな問題がない親であっても、子育てをしていると誰かに悩みを相談したいと考えている実態と、家族自体が隔離されている社会のありようを考えさせられた。内容の濃い番組だった。多くのメディアは、何か痛ましい事件が起きると特異な現象を追いかけることは得意だが、何げない日常の中で数多くの人が抱えている問題の裾野を描き、取材することについてはＮＨＫが傑出している。この番組はまさにその代表格だ。今後も、多くの人が共有している問題を伝えていってほしい。

○　日頃から子育てについての考え方が多様化していると感じていた。問題を抱えながら子育てをしている人たちに、児童相談所という頼れる場所があることを伝えられればよいと思う。児童相談所の存在意義がもっと発信されるようになってほしい。一時保護された子どもの気持ちは、スタッフとの信頼関係があったからこそ、聞くことができたのだろうと思った。

○　人ごとではないと思った。ことばの虐待は身体を傷つけないが、精神的にどういう影響を与えるのかを改めて知ることができた。しつけと言いながらもことばづかいによっては、虐待になっているのでないかと考えさせられ、ことばを大事にすることの大切さを痛感した。番組としてはまとまっていたと思うが、前半と後半で取り上げる子どもの年代が異なっており、話の流れが少し分かりづらかった。子育ての話は共感できる内容だったが、ＮＰＯ法人ではどのような人が支援を受けられているのかが定かではなかった。重要な点なので、改めてもっと深く取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

児童相談所は多くの課題を抱えている。虐待はほぼしつけから始まっており、しつけから始まらない虐待はないのでないかという専門家もいる。今後もさまざまな面から虐待の問題について取り上げていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月１日(日)から８日(日)のＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地

震」を見た。大変有意義でリアリティーを持って防災意識を呼びかける力作だった。あえて言えば、ドラマの中に出てくるテレビ局の様子が現実離れしていたように思う。やや過剰に演出している部分が散見された。全体としては、社会に注意喚起を促すよい作品だった。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」を見た。エンターテインメントとして興味深く見ながらも、いろいろと考えさせられる内容だった。状況によっては、必ずしもすぐに自宅に帰らずにその場に留まったほうがよいという情報には考えさせられた。番組を見たあと、非常食を増やすなど防災意識が高まった視聴者も多かったのではないか。一方で、ドラマのストーリーはよかったが、不正確な情報をどう扱うべきかを消化できないまま終わった点が気になった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」では、ドキュメンタリーだけでは実感を持って伝えきれない部分もあるのではないかという思いから、より衝撃や臨場感をもって体験してもらえるようドラマの手法を取り入れた。若い世代を含む多くの人たちに見てもらうことができた。ドラマは感情移入してらえるような内容を心がけたが、それがどこまで許容されるのかは今後の課題としたい。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」を見た。政府の被害想定に基づき、最新の研究成果や各分野の専門家の知見をうまく反映していた。首都直下地震の全貌、特に再現ドラマの部分については被災の姿がとてもリアルで、説得力があり、社会に警鐘を鳴らす内容だった。首都直下地震への漠然とした不安はあっても、命を守るためには、個々人の危機感や知識の面、また、社会全体の備えという面からも想定される事態を正面から受け止めた備えができていないのが現実だ。そういう問題意識を持ちながら、インターネットでの展開も含め集中した形で番組を編成したことは公共放送として意義がある。専門家のコメントなどから多くの視聴者が気付きや必要な知識を得ることができたと思う。映像も含め、さまざまな知見が改めて集積されたように感じる。今後どう生かすのか、引き続き検討を進めてほしい。ただ、スタジオでのやりとりには、もっと深みがあってもよかったのではないかと思う。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」を見た。東日本大震災から約９年近くがたち、私たちの危機意識は薄れてきていると思う。ドラマの演出につ

いては、スタジオの被害が少ない点や地震直後の復旧の早さなどが不自然に感じるところもあった。１週間放送を見続けるのは難しい人も多いと思うので、このようなシリーズは何か月かに１回の割合で放送していくとよいのではないか。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」を見た。映像を通じて災害を疑似体験することで、防災意識を高める試みはＮＨＫの真骨頂だと思う。これまで放送してきた番組では紹介しきれなかった内容も、今回のシリーズで描けたのではないか。集中編成で、満を持してやっているのだろうと強く感じた。このような企画をこれからも続けて、公共メディアとしての役割を発揮してほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」を見た。どの番組も力作だった。ＶＦＸの技術を使いながら、あれほどのシミュレーションができるのであれば、ほかにもいろいろなことが疑似体験できるだろう。メディアで災害の恐ろしさを伝えることは非常に重要だ。「ＮＨＫスペシャル」では、災害に備える気持ちを常に持つ重要性に触れ、「生きるスキル」では、具体的な訓練や備え方を紹介するなど、並行して伝えていた点がよかった。１２月４日（水）と５日（木）に放送されたハートネットＴＶ「誰も取り残さない防災　首都直下地震が起きたら（前編）（後編）」は、障害者の人たちが地震が発生したことを想定した避難訓練を行い、意見を交わしていた。当事者が議論していることは何よりも説得力があった。今回の一連のシリーズについて、すべての番組を視聴するには大きなエネルギーがいるというのが正直なところだと思った。全体を整理するような構成や別の番組があればよかった。いろいろな引き出しに知識やスキルを入れ、考える力を醸成することが重要だ。テレビをつけたときにちょうどドラマの中で首都圏が燃えている映像が流れ、「関東で大地震」というテロップが出ていたので、本当のことかと思い、驚いた。どこから番組を見てもドラマだと分かるような工夫をしてほしかった。

（ＮＨＫ側）

ドラマ部分はふだんのニュースとは異なる画角にし、見ても誤解されないよう配慮した。

○　地震の恐ろしさや災害に備える重要性は分かっていても、人間は忘れがちだ。驚くほどの臨場感で、人々に考えなければいけないという気付きを与えるという意味でよい番組だった。

○　ドラマの流れに合わせてグループチャットにメッセージが流れるなど、ドラマの設定とリアルな時間軸が連動し、まるでドラマの世界に入り込んでいるような体験

ができるようになっていた。地震が起きる想定の時間に連動する丸の内のサイネージにどんな内容が流れるか期待していたが、総合テレビの内容がそのまま流れていた。ドラマを通じて、裏の取れていない情報を流すと混乱するが、裏を取っていては逃げ遅れてしまうかもしれないということが分かり、メディアからの情報発信の舞台裏を見ることで、自分自身がリテラシーを身につけ、主体的に情報を取りにいくことが必要という基本的なことを改めて考えさせられる番組だった。自らの防災意識を高めるきっかけになった。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」を見た。地震に伴う火事について取り上げており、どう対処したらよいかという説明もしていて、よかった。番組があまりにも多岐にわたっていたので、シリーズをすべて見られるまとめサイトのようなものを作るとよいのではないか。番組で取り上げたことは重要なことばかりなので、何らかの形で残すことも検討してほしい。

○　１１月２４日(日)のＮＨＫスペシャル　第１集「ご飯～健康長寿の敵か？味方か？～」を見た。５回シリーズのようだが、分かりやすく伝えていた。海外の研究成果など、科学的な分析も紹介しており、単に「ご飯は日本の食文化です」という話にとどまっていなかった点がよかった。単糖類、多糖類、太りやすい糖質、糖質ダイエットなどもきちんと伝えていて、興味深く見た。

○　１１月２６日(火)のクローズアップ現代＋「虐待　親たちの“再出発”～カウンセリングの現場から～」を見た。番組内で虐待の加害者のカウンセリングを取材していた点が印象的だった。被害者がいる一方で、加害者がおり、犯罪を防ぐには加害者のほうに対処する必要性を感じている。再犯率の高さや加害者の心の問題に焦点を当てていた点も興味深く、犯罪を少なくするために取り組むというＮＨＫの姿勢を感じた。

○　１２月４日(水)のサンドのお風呂いただきます「伊豆　河津温泉郷」を見た。サンドウィッチマンが出演していたので何気なく見始めたが、楽しめる内容で次回も見たくなった。旅番組なのか、その土地の特色を紹介していく番組なのかはよく分からない感じもあったが、ほのぼのとしてよい番組だった。旅に行きたい気持ちになった。

（ＮＨＫ側）

「サンドのお風呂いただきます」は、2019 年の４月から定時番組として放送している。サンドウィッチマンは好感度が

高く、最近は若い女性も含めた現役世代にも見られるようになってきている。この番組は、温泉番組でも、歴史番組でも、紀行番組でもない複合的な内容を目指しており、今後もより多くの方に見ていただけるよう努力したい。

○　１２月１１日(水)の「ニュースウオッチ９」で農林水産省の元事務次官の事件を取り上げた際、裁判のやりとりをナレーターが感情を込めながら伝えていた。ニュースは客観的であるべきではないか。

（ＮＨＫ側）

裁判での被告の発言内容の伝えがどうであったか、確認の上、次回の審議会で報告する。

○　農林水産省の元事務次官が息子を殺してしまった事件について、今は元次官の発言を中心に放送されているが、いつか、長男にとってこの世界がどのように見えていたかを伝えることが再発防止につながるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

難しいテーマだと思う。現場とも共有したい。

○　１２月８日(日)の日曜美術館「浮世絵で見る忠臣蔵」を見た。この時期は、ドラマや映画、お芝居などで忠臣蔵が取り上げられ、風物詩となっている面もある。今回は浮世絵という新しい切り口で、非常に興味深かった。国芳、広重、歌麿という浮世絵師がそれぞれ違った取り上げ方をしているという対比にも感心した。忠臣蔵は語り尽くされているように思っていたが、古文書から新事実が解明されたと聞き、今後も興味深い話が掘り起こされるだろうと思った。日本人の琴線に触れる物語だけに、今回の切り口は楽しく見ることができた。

○　１２月１４日(土)のＥＴＶ特集「ある特攻隊員の死～祖母とたどる兄の最期～」を見た。内容もさることながら、ディレクターが「私は」を主語に自分のことばで伝えていたことが、報道の在り方として興味深かった。調査、取材する過程を可視化している点もリアリティーがあり、今後も取材の過程や制作者の思いなどを番組やホームページなどで伝えてもよいと思う。

○　Ｅテレで放送している「アクティブ１０」を見た。この番組はまさに考える力を育てる番組だと思う。考える材料だけを提示し、番組内では答えを出さない、自ら

考えなくてはいけない番組としてとてもすばらしい。探究心に火をつける内容だ。課題発見の方法、観察・実験の手法、仮説の立て方、その応用のしかたなど、あくまでも思考方法のみに焦点を当てることにより、視聴者が日常の出来事や現象を科学的に探求する思考が育まれるすばらしい構成だ。これから探究型の教育が重要になっていくなかで、視聴者のニーズに合う番組だと思った。

○　１２月６日(金)のＢＳ１スペシャル「さしのべられた救いの手～“原爆孤児”たちの戦後～」を見た。精神的養子縁組というものがあることを初めて知った。原爆孤児たちに救いの手を差し伸べたのがアメリカや韓国の人という話で、国を越えて１人の力でも救うことができる命があることに、戦争の中でのわずかな救いを感じた。戦争を知らない世代がますます増えていく中で、戦争や原爆との距離感が変わっていくだろう。子どものときに聞いた戦争体験と、大人になってから番組や人づてに聞く話とでは、印象が違い、考え方も変わってくる。今後も若い世代に戦争や原爆のことを伝えていってほしい。また、戦争の惨禍が多く人に及んだことも伝えていかなければいけないと改めて感じた。

○　ＢＳ１で放送している「熱血バスケ」を見た。バスケットボールは、八村塁選手の人気などもあり、国民的スポーツになってきていると思う。バスケットボールもＮＢＡ、Ｂリーグ、Ｗリーグとさまざまな話題があると思うので、今後どのように取り上げられるのかを楽しみに見ていきたい。

○　ＢＳ１で２分間のミニ番組「みんなのパラリンピック」を見た。なかでも、道下美里選手を取り上げた「見えてるみたいに走れたよ」の２本が心に響いた。特に、ブラインドマラソンのだいご味を明るく朗らかな歌声で表現していた「見えてるみたいに走れたよ」にひかれた。道下さん自身が歌っていることに途中で気がついた。このような番組をきっかけに選手を身近に感じ、パラリンピックのファン層も広がるのではないか。このような番組が増えてほしい。

○　「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」の「Ｎｅｗｓ　Ｕｐ」で「黒タイツがダメなワケ校則とのたたかい」という記事を読んだ。ニュースでもこの内容が取り上げられているのを見たが、ホームページで改めて整理されたものを見た時、テレビで見たときの印象よりもいろいろな意味で分かりやすく、楽しく、共感もできた。学校と交渉を重ねる生徒たちの取り組みをうまく、柔らかく伝えることができていた。調査報道のような整理のされ方で、大変勉強になった。テレビ番組とは全く違う構成で、インターネットでも良質なコンテンツを提供できるＮＨＫの体制に充実感を感じた。

○　テレビの報道枠は限られているため、取材したことをすべて紹介できないこともあると思う。今後もインターネットを活用していくことは重要だ。

○　ＮＨＫの価値は、本当に重要なことを地道に取材し続けることにあるのではないか。まだ、ふだんわれわれが見られないものを見せてくれるという意味では、１２月１４日(土)に見た「風をつかめ！ヨーロッパアルプス大縦断レース」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:59)は、空を飛んでみたいという人間誰しもが持つような欲求に応える番組だった。見ているだけで非常に気持ちが晴れ晴れとした。テレビの魅力は、社会問題を地道に捉えるところと映像ならではの楽しさを伝えるところにある。また、公共放送は、構造的な社会問題を丁寧に取り上げ、ダイバーシティーに富んださまざまな人の人生をきちんとすくい上げていくことが重要な使命の一つだと感じている。

○　バレエを取り上げている番組を見た。コンクールの様子も紹介されていて、直接バレエを劇場で見ることのできない人にとって憩いの時間になると思った。ＮＨＫならではのテーマだと思うので、今後も芸術に関連した番組をしっかりと放送してほしい。

○　「ラジオ深夜便」を聴いた。音楽や人権インタビューなど多彩な内容でよい番組だった。

（ＮＨＫ側）

前回の審議会で出た質問にお答えする。大嘗祭（だいじょうさい）の報道について、当日のニュースの中では「天皇陛下の即位に伴う一世に一度の伝統儀式」、あるいは「即位後に行うことが皇室の伝統になってきた」などの表現を使い、伝えた。室町時代後期以降、200 年以上にわたり大嘗祭が行われていなかったことについては、インターネットの「ＮＨＫＮＥＷＳ　ＷＥＢ」の記事では掲載されているが、放送の中では儀式の内容などを詳細に伝えるなどしたために、大嘗祭の歴史については詳しく触れられなかった。天皇が即位すると必ず行われてきたというニュアンスで伝わってしまったのであれば遺憾だ。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年１１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１８日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１６人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０１９年度第２四半期・７～９月)について説明があった。続いて、放送番組の種別および種別ごとの放送時間(２０１９年４～９月分)について、次に「インターネット活用業務実施基準」が総務大臣に認可申請中であることに触れた上で「２０２０年度国内放送番組編集の基本計画(案)」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）

委　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）

石堂　真弘（全国農業協同組合中央会常務理事）

今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）

大川　順子（日本航空(株)特別理事）

尾上　　紫（日本舞踊家、女優）

木村たま代（主婦連合会消費者事務局長）

栗原　　友（料理家）

國土　典宏（国立国際医療研究センター理事長）

柴田　　岳（読売新聞東京本社常務取締役論説委員長）

立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）

出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）

西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）

花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）

福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）

藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」

（２０１９年度第２四半期・７～９月）について＞

○　インターネットの指標で「正確な情報を迅速に伝えている」「わくわく・ドキドキする」「求める情報がいつでもどこでも得られる」「視聴するだけではなく、参加できる」といった項目の指標が改善すると、放送を補完して、新たな価値を提供する役割を担えると思う。特に「わくわく・ドキドキする」という指標は総合テレビでやや低い評価なので、インターネットで「わくわく・ドキドキする」という価値を提供できれば、相互に補完し、望ましい結果が得られるのではないか。今年は災害時の報道が充実していると感じているので、１０月以降の四半期報告で、インターネットの指標にその影響が出てくることを期待したい。インターネットの評価を示すレーダーチャートに動きがないが、高止まりしているという認識なのか、それとも伸びていないという認識か。

（ＮＨＫ側）

「わくわく・ドキドキする」という指標が、インターネットにも求められる役割であるにも関わらず伸び悩んでいることは認識しており、今後の課題だと思っている。インターネットサービスは放送を補完し、公共的価値の実現を目指すサービスとして「わくわく・ドキドキする」の指標を伸ばしていきたい。

○　質的指標のレーダーチャートを見ると、今四半期は前回と比較し全体的に縮小傾向にあり、インターネットの指標で顕著だと感じる。どのように考えているのか。

（ＮＨＫ側）

訪問者、アクセス数に関しては増えているが、放送と異なるサービスを求めているお客様の期待に応えきれていない面があるのかもしれない。災害報道時のＮＨＫのインターネットサービスや、ドキュメンタリーやスポーツ番組におけるインターネット展開などでは、ＮＨＫならではのサービスが提供できつつある。利用者は増えていると思うのだが、指標は下がっている。引き続き利用者のニーズの分析に努め指標の改善につながるようなサービスの充実をはかっていきたい。

○　評価方法も含め、検討を重ねてほしい。

＜２０２０年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～予備審議～＞

○　「編集の重点事項」の「２．持続可能な社会を見据え、日本と世界の課題を深く正確に発信」では、地球規模で見ると発展途上国を含め、人口は増加傾向にある。誤解を招かないよう表現してほしい。「編集の重点事項」の「６.地域放送局と本部が連携して、地域の活性化と暮らしに貢献」では、命と暮らしを守るための決意をしっかりと表明してほしい。全体的に文化、福祉、教育、芸術、科学技術というキーワードが入っているが、食、医療というテーマについても言及してほしい。

○　「編集の重点事項」の「３.多彩で質の高い番組・コンテンツを、幅広い視聴者に提供」では、放送とインターネットが別々のサービスであるかのような表現がある。さまざまな仕組みを使い、そのコンテンツを届ける環境が整おうとしているときに役割を分離するかのような記述があると誤解を生みかねない。放送の未来を考える上で、表現方法は検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

「編集の重点事項」の３では放送とインターネットの役割を明確に分けるということでなく、各波の役割がそれぞれあるのと同様に、インターネットにも役割があるということで、放送とインターネットを別のものにするという意味ではない。インターネットは放送の補完サービスという位置付けだが、放送と一体的にサービスを展開していくものだと考えている。

○　「編集の基本方針」では、放送法を踏まえた公共放送としての基本姿勢の堅持、自主自律、不偏不党を貫く姿勢という極めて重要なことが明記されている。「ＮＨＫは視聴者のみなさまの暮らしに貢献するために、新しい時代の期待に応える進化をめざす」という箇所は、もう少し具体的に分かりやすく表現をしてもよいのではないか。「各波の編集方針」のうち、総合テレビジョンでは、日本は重要かつ深刻な社会的課題を多く抱えているので、ＮＨＫは、視聴者の参加も得ながら、番組を通して解決の道を探っていくという積極的な姿勢を表現してほしい。ＢＳプレミアムの編集のポイントでは、率直過ぎる表現が目立つので、東京オリンピック・パラリンピック期間においても多彩なテーマやジャンルで魅力のある番組を提供していくといった表現に留めたほうがいいように思う。

○　「編集の重点事項」の「４．“東京２０２０”の機会を生かし、その先の文化創造に貢献」について、日本の魅力を世界に伝えるだけでなく、日本人が世界の文化

を学ぶ機会でもあるという要素を盛り込んでもよいのではないか。また、「５．多様な価値を認め支えあう社会をめざした放送・サービスを充実」では、社会にはさまざまな立場の人たちが存在していることを前提として、互いに認め合うという方針を打ち出したほうがよい。同様に、「７.これからの社会を担う若年層や子どもの教育、健全な育成を支援」については、すべての人が社会を支えているということを踏まえた上で、若者や子どもの健全な育成を支援したほうがよいのではないか。また、これからの社会は、不確かな情報を退け、事実に基づいて問いを立てる力や探求する力が重要になると思う。公共放送として何をイメージしているのか、具体的に書いてもよいと思う。四半期報告の「達成状況の評価・管理」では、総合テレビジョンはいつも「わくわく・ドキドキする」の評価がやや低くなる傾向がある。総合テレビではあくまでも人々の安全・安心を守る報道が重要だが、多くの方に届く番組を制作するためには、視聴者が「わくわく・ドキドキする」ことをあきらめてはいけない。この要素について、総力を挙げて追求していくというニュアンスがほしい。「各波の編集方針」の教育テレビジョン（Ｅテレ）については、これから若者や子供たちが必要になる力についての言及があってもよいと思う。

○　「編集の基本方針」では、2019 年度を振り返り、2020 年度を見据えて、公共メディアとしてのあり方や基本姿勢を明確に強く表明することが非常に重要だ。取材力や制作力の信頼性を強調してもよいのでないか。インターネットで実施しようとしている常時同時配信については、新サービスの紹介だけでなく、公共メディアとしてＮＨＫが取り組むことの意義や基本姿勢を「編集の基本方針」で表明してほしい。また、東京オリンピック・パラリンピックに向けては、公共放送としての役割や方針を盛り込んでもよいのではないか。「編集の重点事項」の５では、多様な価値を認め合う社会にＮＨＫも参画しているということをうたってもよいのではないかと思う。「各波の編集方針」のうち、ＢＳプレミアムの表現方法が他のメディアと違っているように感じる。率直過ぎる箇所については、修正も含め検討してほしい。

○　「編集の基本方針」に「自主自律と不偏不党を貫いて」と明記することは非常に重要なことだ。インターネットからしか情報を得ない人たちが増えているので、これからは、インターネットを使った情報伝達も行っていかないと公共放送としての役割を果たせないかもしれない。インターネットも活用した公共放送のあり方を今後も検討していく必要がある。また、全体的に、カタカナ語が多いように思う。一般的に広く読まれるものなので、ことばの選択は考えたほうがよい。

○　医療分野について言及されていないが、「編集の重点事項」やＥテレの編集のポイントなどで、福祉に関する記述があるので、健康や医療についても取り入れてほしい。

○　医療についてはすでに多くの番組で取り上げられているテーマでもあり、視聴者のニーズもあると思うので、適切に表現するとよい。

○　全体に総花的、総論的な印象を受ける。ＮＨＫとして何の問題に取り組み挑戦していくのかといった、各論的な部分に踏み込んだほうが読み応えもあり、記憶にも残るのでないか。また、国民の暮らしに直結するテーマにもかかわらず「政治・経済」に関する記述が少ない。メディア全体が担うべき役割や公共放送としての責務を具体的に記述してもよいのではないか。「編集の重点事項」の５については、共生社会について書かれているが、外国人労働者との共生についても記載したほうがよいように思う。「編集の重点事項」の６では、地域問題に取り組むという意思表明がなされているが、地方分権の問題にも触れないわけにはいかないのではないか。検討してほしい。また、インターネットの技術で可能になったことは、双方向によるサービスだ。ＮＨＫはすでにさまざまな番組で取り組んでおり、オープンジャーナリズムの手法を用いた例もある。今後も、視聴者参加の双方向型の番組制作を行っていくことを明記してもよいのではないか。一方で、ここ数年、基本方針の内容が増えているように思う。受信料で成り立つ組織として、どのように効率的で効果的な番組制作を行っていくのかをはっきりと打ち出してほしい。

○　「編集の重点事項」の５は、すべての人に向けたメッセージだということが分かる表現にしてほしい。これまでＥテレが障害者スポーツを取り上げるときは、多様性を認め合い共に生きるという部分が強く含まれていた。来年はハイパフォーマンススポーツの部分は総合テレビで、それ以外の部分はＥテレ、もしくはＢＳという形になるのではないかと想像している。障害者の人生は能力主義との闘いのようなところがあると考えており、その中でパラリンピックをハイパフォーマンススポーツとしてのみ放送するのは、普通に暮らしている障害者たちにプレッシャーになると感じている。ＥテレやＢＳの役割として、さまざまな生き方があり、それを認め合って生きることが共生社会だという方針が示されるとよい。

○　「編集の重点事項」の７について、インターネットの問題点を挙げた直後にインターネットの活用について書かれていると矛盾を感じる。

○　「編集の重点事項」の７について、文脈から意図していることは分かるが、表現

を検討してほしい。

○　視聴者は手元にスマートフォンしかなければスマートフォンで見る。立派な高精細ディスプレイがあればそこで迫力のある映像を見る。これらの視聴者ニーズに一貫して応えられるような体制、ビジョンを持つことが重要だ。

○　将来、番組をインターネットで配信するだけでなく、データの活用も重要になってくるのではないか。それが「編集の基本方針」の「最高水準の放送・サービスの実現をめざす」ことにもつながると思う。ＮＨＫと民放が連携し、国民がより豊かな映像体験をできるようにしてほしい。

○　２点懸念していることがある。一点目は、現在の「国内放送番組編集の基本計画（案）」は、インターネットの活用および常時同時配信が行われる前提で立論されているので、状況が変わった場合どうなるのかという点。もう一点は、よりよい番組やサービスが増えることを歓迎する人もいれば、ＮＨＫの肥大化を懸念する人たちもいるなかで、さまざまなところに「多様なニーズ」「多様なジャンル」「多彩な番組」と「多様」や「多彩」ということばが散りばめられていることが気になる。

＜放送番組一般について＞

○　「ＮＨＫスペシャル」をいつも楽しみにしている。１１月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「ダビンチ・ミステリー第２集　“万能の天才”の謎～最新ＡＩが明かす実像～」は医学史に関する内容も多分に紹介されており、興味深く見ることができた。

○　１１月１２日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「モンスターの素顔～プロボクサー・井上尚弥～」を見た。重要な試合の前によく１０か月も密着できたと思う。スタッフとの信頼関係がかいま見え、とてもよかった。あれほど強い選手からでも、常に不安で、まだまだ自信がないという趣旨のコメントがあった。他のさまざまな競技の選手たちにも通底することばだと思った。

○　１１月１７日(日)の目撃！にっぽん「激論の“トリエンナーレ”～作家と市民の７５日～」を見た。この出来事について、作家やアーティスト、市民の方々の議論の様子を賛成、反対両方の意見を踏まえながら冷静に伝える番組だった。どちらがよいか悪いかではなく、両者のコミュニケーションが成立しているのかどうかを見

せていた。自分自身も見失っていた要素に気づかされる内容で、良質な番組だったと思う。印象に残ったのは展示が中止になって以降、「サナトリウム」と称して居酒屋に集まり、作家と市民の方々が意見交換している場が紹介されていたことだ。交流はないと思っていたので、意外性があった。いろいろな意味で啓発され、よい番組だった。

○　「ネーミングバラエティー日本人のおなまえっ！」を見た。番組が始まった当初は名字そのものをテーマにしていたが、最近はテーマの範囲が広がってきたように思う。１１月１４日(木)の「京都おなまえ修学旅行」で京都の地名などを紹介していた。１１月２１日(木)の「おなまえで再発見！ホントの京都」は、その続きの内容だった。ＮＨＫには、いろいろなバラエティー番組があるが、それぞれの特徴が徐々になくなってきているように思う。

○　１１月４日(月)と９日(土)の土曜ドラマ「サギデカ」の再放送を見た。とてもよい番組だ。連続ドラマで一つのテーマをあのように突き詰めていけるのはＮＨＫの強みだ。今後も社会の根底にある問題を掘り下げていく番組を制作してほしい。

○　よるドラ「決してマネしないでください。」を見た。原作もすばらしいが、この内容を映像化した点を高く評価したい。原作はあくまでも科学史を伝える物語になっており、その特徴をしっかりとドラマ化できていると思う。一見、珍妙に見える理系のエピソードが、クスッと笑え、共感できる。どんな実験でも真剣に取り組んでいる様子をしっかりと映像化しているので、迫力が感じられた。また、恋愛に対しても科学的アプローチで分析し、真実の追求に向け猛進している様子が興味をひいた。そのほかにも物語の合間に科学を大きく進歩させた偉人のエピソードが紹介されているおり、多岐にわたる科学的な知識を身につけることができる。聞いたことのないことばを知るという意味でもとてもよい番組で、若者が科学に興味を持つきっかけになると思う。われわれが豊かな生活を送ることができるのは、偉大な先人たちのおかげだと気付かされた。なお、原作では最後に真似ができる実験が掲載されているので、テレビでもその内容を放送してもよいのではないか。

○　ドラマ１０「ミス・ジコチョー～天才・天ノ教授の調査ファイル～」を見た。周囲から、ドラマとしてはおもしろいが、コメディの要素が強すぎるので、事故調査委員会が真剣なものを扱う組織であることをもう少し強調してはどうかという意見があった。

○　プレミアムドラマ「歪(ゆが) んだ波紋」を見た。内容もさることながら、存在

感のある俳優たちが出演しており、今後の展開に期待している。

○　大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」は視聴率が低いと言われているが、興味深い話もあり、勉強になる。視聴率に左右されず、よい番組を作り続けてほしい。次の大河ドラマに出演予定だった俳優が逮捕されたが、こういう問題が起こったときにどのような原則で対応しているのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

事実関係や視聴者に与える影響などを考慮し、総合的に判断している。ＮＨＫでは、取材・制作の基本姿勢を明記した「国内番組基準」に基づいて番組制作を行っている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫも薬物の恐ろしさを伝える番組を多く制作しているので、今回の事案を重く受け止めている。今後の対応ついては、慎重に検討していく。

○　１０月１９日（土）のＴＶシンポジウム「ひきこもり１１５万人～人を大切にする社会に～」を見た。国谷裕子さんの司会で、大変濃い内容だった。特に現場で支援に取り組んでいる人たちの話はそれぞれ特徴があり、とても有益な内容だった。ただ、番組では、周りで話しを聞いている参加者からの発言が少なかったのが残念だった。中高年のひきこもりの問題を引き続き取り上げてほしい。

○　１１月１０日(日)の未来スイッチ「大丈夫？ＳＮＳの使い方」を見た。「インターネットは匿名ではない」と説明していた点が印象的だった。朝の５時１０分からの放送だったが、インターネットを使う若い世代に見られる時間帯にもっと放送するとよいのではないか。番組の内容と放送している時間帯の視聴者層が合わないように感じた。

○　１１月１０日(日)のＣＯＯＬ　ＪＡＰＡＮ「学校行事～ｓｃｈｏｏｌ　ｅｖｅｎｔｓ～」を見た。夏休みの自由研究、修学旅行、体育祭について取り上げていた。いずれも私たちにとっては特別ではない普通の行事だが、外国人からの評価が高いことに驚いた。日本の学校は、海外に比べて自由度が少なく、生徒も消極的で、受験勉強の準備に忙しいなど、ネガティブなイメージがある。番組では学校行事や自由研究など、授業では得られないものを経験させていることを外国の出演者が高く評価しており、日本にも誇るべき文化があることに気づかされた。日本の教育の特

長として、学校行事をもっと発信してもよいと感じた。番組のテンポもよく、充実した内容の番組だった。

○　１１月１０日(日)のＢＳ１スペシャル「新大久保“多国籍会議”　ニッポンの未来が見える町で」を見た。人々が商店街や町の未来を見据え、地域の多文化共生に向けて努力する姿を分かりやすく伝えており、大変見応えがあった。特に日韓の政治的対立が深刻化している状況を踏まえると、タイムリーかつ有意義な番組だった。新大久保で働き暮らす日本、韓国、ネパール、ベトナム４か国の商店主たちの「４か国会議」では、各国の文化や生活習慣の違いへの理解を進め、時には民族間のさまざまな問題、怒りが錯そうし、あつれきや葛藤も生じていた。新大久保の町の変遷や外国人を取り巻く現実、人々の率直な本音をうまく引き出しており、とても考えさせられた。地域における多文化共生の難しさも実感したが、困難を乗り越えていける可能性も示唆した番組だったと思う。

○　１１月１０日(日)のＢＳ１スペシャル「新大久保“多国籍会議”」を見た。放送のタイミングもよく、内容も人々に気づきを与えてくれるＮＨＫらしいすばらしい番組だった。

○　１１月１０日(日)のＢＳ１スペシャル「新大久保“多国籍会議”」を見た。Ｄ＆Ｉ（ダイバーシティ＆インクルージョン）ということばもあり、日本でも多様な人が共存する社会になってきているが、現状、外国人が日本の社会で暮らしていくことは難しいと改めて感じる内容だった。

○　深夜にＢＳプレミアムで「ＭＵＳＴ　ＢＥ　ＵＫＴＶ」という番組が随時放送されているが、取り上げている年代が少し新しいように思う。1960 年代の音楽も取り入れてほしい。

○　１１月７日(木)から１５日(金)にドバイで行われたパラ陸上世界選手権２０１９を総合テレビの深夜帯で放送していた。視聴者からの投稿をリアルタイムで見ていると、偶然目にした人が夢中になり見続けているのではないかという印象を持った。平日深夜帯にもかかわらず多くの世帯が見ていると聞き驚いた。パラスポーツは楽しく、わくわく・ドキドキしながら見られるものだということを再認識することができた。来年の東京オリンピック・パラリンピックに向け課題も多いとは思うが、限られた放送時間のなかで工夫をこらし、多くの競技を取り上げてほしい。

○　大嘗祭の様子を伝えるニュースを見た。番組の中で、天皇が即位する際には、必

ず大嘗祭が行われてきたようなニュアンスで説明していたように感じた。史実では中断している時期もあるので、事実確認できればと思う。

（ＮＨＫ側）

大嘗祭をどう伝えたかについては、確認の上、次回の審議会でお答えする。

○　ＮＨＫの番組は、バランスよくさまざまなものを見る楽しみもあるが、一つのテーマを追求する番組にとてもひかれている。今後も物事を深く掘り下げた番組を制作してほしい。

○　ラグビーワールドカップ２０１９日本大会では、ＮＨＫでも多くの試合を放送していた。日本戦以外の試合も多く放送し、昔からのファンにとっても今回のワールドカップを機に好きになったファンにとっても、安心感のある分かりやすい放送だった。

○　この秋に展開されていた発達障害キャンペーンは、全体として多彩な切り口で、親しみの持てる充実した内容だった。なかでも、１０月２９日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「あなたらしく笑顔で生きて～精神科医・本田秀夫」では、患者ひとりひとりの人生を対等な立場で応援する姿勢がよく表現されていた。発達障害の家族を抱える人たちに届けたい内容だった。１０月３１日(木)の所さん！大変ですよ「発達障害スペシャル」(総合　後 7:30～8:42)では、発達障害の人たちがさまざまな場所で活躍する姿を表現しており、一人一人の良さがよく伝わる内容だった。

○　発達障害を取り上げた番組を数多く見たが、それぞれの番組が関連し合う内容となっていて、よかった。このようなキャンペーンは今後も続けてほしい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年１０月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１０月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２１日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、骨の髄まで歌います「新大久保　ニッポンで働く外国人へ」(前編)(後編)について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)特別理事）
木村たま代（主婦連合会消費者事務局長）
柴田　　岳（読売新聞東京本社常務取締役論説委員長）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜骨の髄まで歌います「新大久保　ニッポンで働く外国人へ」（前編）（後編）
（ＢＳプレミアム　９月２日(月)・３日(火)放送）について＞

○　働く人たちの悩みを聞き、その思いを歌にして届けるという活動はすばらしいと思った。ホネボーンのＥＭＩＬＹ（エミリー）さんの歌が心に響いた。働くというテーマだけではなく、ほかのテーマに広げていってもよいと思う。例えば、過去のオリンピックのテーマソングを聴くと選手たちの名シーンが思い出されるということがあるが、この番組では自分自身に向かって歌ってくれているので、より胸が熱くなるだろうと思った。感動の押しつけや歌い手の自己満足で終わってしまうこ

とと紙一重な部分もあるが、ホネボーンの２人は相手の気持ちに寄り添うことができていた。もし、自分がホネボーンの２人に悩みを打ち明け、歌を歌ってもらったら、どのような気持ちになるだろうかと想像しながら見ることができた。

○　歌は心を表し、人々の共感を呼ぶものだと感じた。相手からどのくらい話を聞き、曲を作るまでどれくらいの時間をかけるのか気になった。それぞれの人たちとじっくり向き合うことで、単なるインタビューとは異なる本音の部分が聞けると思う。そのような話をほかの番組制作に活用することはあるのか。

（ＮＨＫ側）

作詞を担当するホネボーンのＥＭＩＬＹさんが、歌にできると思うまで相手の話を聞いてもらうようにしている。話を聞く時間はおよそ３０分から１時間で、歌が完成するまでの時間は、５分のときもあれば、１５分ほどかかる時もある。うかがった話は、まずはこの番組に生かしていきたいと考えている。

○　日本で働く外国人の本音を聞くことができていたので、ＮＨＫとして、ほかの番組制作にも生かせるとよいのではないかと思った。

○　働く人たちの喜びや悩みが率直に伝わり、胸を打つ内容だった。最初は番組のコンセプトがよく分からなかったので、ホネボーンが働く人のための歌を作り歌うことを生業にしているのか、この番組のためだけに行っているのかが分からなかった。また、２人のバックグラウンドも気になった。決められた時間の中で毎回実施するのは難しいかもしれないが、字幕などで２人の紹介や番組のコンセプトを説明してもよいのではないか。

○　ホネボーンの２人のキャラクターに好感が持てたので、ふたりが何をしていくのか興味を持ちながら番組を見ることができた。ＢＳプレミアムは視聴者のさまざまな趣味やしこうに応えていくチャンネルだと思う。ホネボーンファンの視聴者が見ても楽しめる内容であるということが重要だ。最終的に音楽や歌のよさが伝わり、見終わったあと、さわやかな気持ちになった。２人が訪問先に自然に溶け込んでいる姿が印象的だった。この放送回しか見ていないが、相手がサラリーマンでも、酪農家でも、同じように自然に溶け込んでいくのだろうと思った。

○　最初はこの番組をどのように見ればよいのかという戸惑いがあったが、見続けて

いくうちに「鶴瓶の家族に乾杯」や「梅沢富美男と東野幸治のまんぷく農家メシ！」などと似たようなイメージで捉えた。働く人を応援するというコンセプトが伝わってきた。１０月１６日(水)の「動物園の飼育員の悩みを感動の歌に！」（前編）も見た。働く人を応援するという番組のコンセプトがしっかりとなじんでいたためか、よく理解することができた。今後も番組を継続し、さらによいものにしていってほしい。

（ＮＨＫ側）

朝の７時台に放送しているので、できるだけさわやかな気持ちで仕事に行ってほしいという思いで制作している。

○　歌や音楽の持つ力を感じて、共感できる内容だった。登場人物の思いが伝わってきたのは、ホネボーンの歌の力によるところが大きいと思う。あのような短時間で詞を書き、人に伝わる音楽を作り、歌唱力もあるというのは、いったいどんなアーティストなのだろうという驚きがあった。ＮＨＫの役割の一つに共感できる番組を制作していくという使命があるのではないか。番組を見て共感することで、人と人はつながりあい、離れていても地続きだという気持ちになった。労働者という人格があるのではなく、働いている人たちひとりひとりがあらゆる感情を持った人間だということを、番組を通して伝えることができていた。即興の詞とメロディ、歌唱力を掛け合わせることで完成する番組だった。

○　働く人たちの悩みを聞いてホネボーンの２人が作る歌は、非常にすばらしいと思った。最初に見たときは、歌を聴かせたい番組なのか、さまざまな境遇の中で働いている人を応援したい番組なのか、その裏にある何らかの課題に目を向けさせたい番組なのか、制作意図が分からず戸惑い、番組当初のコンセプトとホネボーンの２人を起用した理由が気になった。１４分の番組の中で多くの歌が歌われていたが、歌によっては、悩みを聞いている時に出たことばとほぼ同じことばを歌詞に乗せて歌っているものもあった。自分が発したことばが歌詞になれば当事者は当然感動するだろう。しかし、視聴者としては、直前に聞いたことばがそのまま歌詞になりリズムがついて歌われているだけという印象も否めない。話をじっくり聞いているのであれば、どのようなことばを語ったのかまとめた上で最後に１曲聴かせるほうが、それぞれの人たちが何を思いながら働き、今回であればどのような気持ちで日本に来ているかということを、よりしっかりと伝えることができたのではないか。

（ＮＨＫ側）

ホネボーンの２人の感性や即興力をどうすれば生かせるか

を考え、番組を制作し始めた。最初は団塊ジュニアの人たちに話を聞くというテーマで取材していたが、世代で区切ると悩みが多種多様になり、歌の方向性を定めるのが難しかった。試行錯誤する中で、働く人たちからは仕事の話が自然と出て、ホネボーンの２人も共感しやすかったことから、徐々に今のような形になった。

○　外国人労働者が増え、日本にさまざまな国の人たちがいることを取り上げた番組が多くなってきている。しっかりと取り上げている点は評価したいが、常に厳しい議論を重ねるだけのアプローチでよいのかという思いもある。今回の番組は、外国人が集まる新大久保という町が舞台になっており、外国人との共生社会について考えるにはよい場所だと思った。柔らかな切り口で、社会問題への気づきを与える構成になっていた。

○　番組全体を通じてさまざまな人たちの思いを率直に伝えることができていた。働く人たちの今をリアルに表現しており、カメラワークやナレーションも含め、番組全体が日々を懸命に働き暮らす人々への共感にあふれていた。そのことを高く評価したい。日本には、戦後の復興期に働く人たちが作り上げた「労働歌」が数多くあったが、今では歴史の中にほとんど埋もれてしまった。番組で歌われていた歌はまさに現代の「労働歌」ではないかと思う。番組の内容を考えると、週末の夜にしみじみと見られる時間帯がよりふさわしいのでないかと思った。会話の中で引き出したことばや共感した内容を歌にしていた点は分かりやすかった。相手が語ったことをもう少し紹介すると、ホネボーンの２人が何をすくい上げ、曲を作っていったか、具体的に分かったのではないか。レギュラー化を期待したい。

○　この短い放送時間で、日本で働く外国人の姿をしっかりと伝えることができた番組だった。パネルディスカッションなどでは伝えきれないことも、映像と音楽と構成の力で表現できており、非常に感動した。ホネボーンの２人は聞いた悩みをほとんどそのまま歌詞にしていた。もっと広くすくい上げるべきという考えもあるが、発したことばをそのまま使うことで、むしろ感動が深くなっているように思う。また、ホネボーンの２人が何者かを説明しないほうがこの番組にひきつけられるのではないか。余韻が残り、さまざまなことを考えるきっかけになる番組だった。

○　人のやさしさを改めて感じる番組だった。老若男女、多くの人の心に響く内容だったのではないか。ＥＭＩＬＹさんが相手の思いをうまく引き出し、共感し、受け取った気持ちを素直に歌にして伝える姿に感動した。今回は社会的な課題へのア

プローチという側面もあるかもしれないが、番組の中ではあえて結論を出すようなことはしていなかった。飾り気なく伝えているので、多くを語らなくても歌を贈られた人は感極まり、視聴者も感動したのではないかと思う。人の気持ちを引き出す力、共感力、伝える力の大切さを改めて感じた。人への寄り添いということばを昨今よく耳にするが、その本質を感じる番組だった。

○　ドキュメンタリーは切り口が重要だと思った。働く人を応援する歌というと「労働歌」があったが、当時は高度経済成長期のひずみにより労働者のさまざまな問題も出てきた時代だった。今は働き方が多様化したことにより、新たなひずみや違った希望が出てきた面がある。働く人に焦点を当てているのはよい切り口だと思った。一方で、同じようなパターンで歌を作っているので、前編と後編を続けてみると、重複感があった。押しつけになってしまうとよくないので、１人の働き方を１日１つずつ紹介していくような放送のしかたでもよいのではないか。

○　ことばの持つパワーに感動した。人々の思いを歌詞にし、音楽に乗せるという才能にあふれたホネボーンの２人を見て、すがすがしい気持ちになった。それぞれの人たちのことばが心に届く番組だった。一方で、ほかの放送回もリアルタイムで視聴したが、朝の番組ではないという印象を受けた。番組のコンセプトを考えると、夕方以降や眠りにつく前など１日を振り返る時間帯のほうが適切なのではないか。北海道で歌うシーンもあったが、舞台となる場所で出会った人たちのみで構成したほうが、彼らの悩みをより明確に伝えることができたのではないか。

（ＮＨＫ側）

前向きな意見を多くいただいた。今後制作する際は参考にしたい。

（ＮＨＫ側）

これまでにつらい経験をし、支え合ってきたホネボーンだからできる内容だと思っている。今後もよい番組を制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　例年、ＮＨＫの第二次世界大戦前後をめぐる番組は秀逸なものがある。今年もまさに労作が多かった。８月１５日(木)のＮＨＫスペシャル「全貌二・二六事件～最

高機密文書で迫る～」は日本が内戦に陥るかもしれなかった状況を伝えており、事実と向き合うことの大切さを伝える最後のナレーションは、ＮＨＫの報道姿勢を示すようで印象に残った。2018 年８月１５日(水)のＮＨＫスペシャル「ノモンハン責任なき戦い」、2017年８月１５日(火)のＮＨＫスペシャル「戦慄の記録　インパール」も含め、非常に優れた歴史の検証を行っている番組が多い。今後も期待したい。

○　９月２９日(日)のＮＨＫスペシャル「ＡＩでよみがえる美空ひばり」を見た。美空ひばりさんという誰もが歌唱力のすばらしさを知っている人をモデルにし、ＡＩの技術を使ってよみがえらせ人々を感動させることに成功していた。日本の歌謡曲を取り上げたことで、ふだんＡＩになじみのない人々に対してもその可能性を伝えることができ、社会の受容性を高められたのではないか。多くの人が聞いてみたいと望むものだったからこそ、これほどの感動を呼んだと思う。番組を見て、ＡＩでよみがえらせた落語なども聞いてみたくなった。一方で、倫理的な課題もある。今回美空ひばりさんをよみがえらせたことでどれほどの反響があったのか気になった。亡くなった方の権利についても、これを機会に真剣に議論されるとよい。ＮＨＫはほかにもＡＩに関する番組を制作しているが、この番組を見て人間のすごさを感じた。今回は美空ひばりさんの歌のうまさの秘けつが明らかにされていたが、技術開発を通じ「人間」の解明が進むことはすばらしい。音楽や音楽業界、技術の可能性、また、課題や解明されていない人間の秘密など、あらゆる論点が盛り込まれた番組だった。

○　９月２９日(日)のＮＨＫスペシャル「ＡＩでよみがえる美空ひばり」はすばらしい番組だった。そうそうたるメンバーが集まってＡＩの技術を使うとここまでできるのかと感動した。

（ＮＨＫ側）

感動したという声が多かったが映像の技術が歌声に追いついていないという指摘もあった。

○　１０月６日(日)のＮＨＫスペシャル「大廃業時代～　会社を看取（みと）るおくりびと～」を見た。大変厳しい経営環境下にある中小企業が廃業に至る具体的なケースをバランスよく取り上げていた。廃業が増加している背景や関係者のさまざまな取り組みを有識者の見解なども織り交ぜながら、幅広い観点から取材し伝えていた。中小企業の経営環境は今後も非常に厳しくなっていくだろう。日本で働く人の７割が中小企業で働いているという状況を考えると重大な問題なので、引き続き取材してほしい。

○　１０月６日(日）のこれでわかった！世界のいま「使い捨てプラ禁止に！？インドで深刻ごみ事情」を見た。レギュラーの坂下千里子さんに加え、大学で環境いついて学んでいるというトラウデン直美さんという大学生も話をしていた。若い人に番組で意見を述べてもらうのはよいと思う。インドの環境に関する取り組みや脱プラスチックの規制が始まったことに関する賛否両論など、日本の現状にも当てはまる内容でよい視点で番組を制作していた。一方、インドの紹介に終始してしまった点は残念だった。環境問題をはじめ社会問題はわがこととして捉えることが重要だ。ＮＨＫが果たすべき役割、公共的価値をより意識して番組を制作することで人々の関心も高まるのではないか。最後に、インドと生中継をつないで話を聞いていたが、音声や映像の伝わる速度に時差があり見づらかった。無理に生中継で話を聞く必要はないと思うので、関連した有識者をスタジオに招き、スムーズな会話で進めるほうがよかったのではないかと思う。この番組でも環境問題は定期的に取り上げてよいテーマだと思う。

○　１０月１３日(日)ＮＨＫスペシャル「東京ブラックホールⅡ　破壊と創造の１９６４年」を見た。１９６０年代は勢いがありすばらしい時代だったという捉え方が多い中で、この番組では高度経済成長に伴う影の部分も提示しておりよかったと思う。

○　１０月１３日(日)のＮＨＫスペシャル「東京ブラックホールⅡ　破壊と創造の１９６４年」は２年前に放送した８月２０日(日)のＮＨＫスペシャル「戦後ゼロ年東京ブラックホール　１９４５－１９４６」に続き、とてもよかった。当時を知らない人に臨場感を持って体験してもらうには、この番組の手法はとても効果的だと思う。一方で、解釈によってはどのようにもとれてしまう側面もあるので、引き続きバランス感覚を保った上で制作してほしい。

○　９月２４日(火)のクローズアップ現代＋「解禁！　“ゲノム編集食品”～食卓への影響は？～」を見た。消費者庁は、ゲノム編集技術で開発した食品について食品表示を義務化しないことを決めたが、その問題点を指摘した番組だった。視聴者がどう考えるかという視点にたった内容で好感を持った。今後も視聴者目線の報道を続けてほしい。

○　１０月１６日(水)のクローズアップ現代＋「徹底討論！それでも必要？一般病院の“身体拘束”」を見た。現場の看護師たちに出演してもらい、討論の場を作ったことは評価したいが、番組を見ると看護師の技量の問題という印象が結果的に強く

残った。それでは現場を一層追い詰めてしまうのではないか。病院の経営や構造的な問題など背景をもう少し深めてほしかった。自助努力の話は美談として受け入れやすいが、真の解決にはつながらない。意見の異なる人たちが議論する構成になっていたが、背景にある両者が共有できるその本質に迫るような展開にできなかっただろうかと考えた。

（ＮＨＫ側）

身体拘束の問題を過去に取り上げた後、反響が大きかったので、続編を放送した。構造的な問題を深めるべきだという指摘は現場にも伝える。

○　１０月５日(土)の「ＮＨＫ　ニュース　おはよう日本」の「土曜の朝のショートストーリー」を見た。「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」にはビジネス特集「ＳＮＳで広がった視覚過敏に優しい“緑のノート”」として掲載されていた。白い紙のノートではまぶしすぎて、字を書くのに困難を感じるという視覚過敏の方が、緑色のノートを作ってくれないかとＳＮＳに投稿したことをきっかけに町工場や企業が動き出すという話だった。番組では見せ方も工夫されており。テレビやインターネットで新しいフォーマットにチャレンジしていることが伺える内容だった。特に若い人たちへの情報の届け方に腐心していると思うが、今後も斬新なアプローチで情報を届けてほしい。

○　１０月１８日(金)からドラマ１０「ミス・ジコチョー～天才・天ノ教授の調査ファイル～」が始まった。理系分野の仕事のおもしろさを伝えられている番組だ。これからの時代は、誰もが理系分野に興味を持つことが大切だと思う。そのような現代の時代背景を反映したドラマで、興味深い内容になっており感心した。

○　１０月１８日(金)のドラマ１０「ミス・ジコチョー」を見た。コミカルタッチのドラマの中に、事故原因究明の重要なキーワードが多く含まれていて、企業関係者はもちろん、多くの人に見てもらいたい番組だ。元事故調査・検証委員会委員長の畑村洋太郎さんが監修しており、畑村さんがよく指摘する内容がドラマにも盛り込まれて興味深く見た。事故の原因究明は技術的な側面だけでないということがよく分かる。検証のシーンもあり、知識偏重や思い込みによる調査に釘を刺しているように感じた。事故やヒューマンエラーについて広く深い視野を持つ重要性を教えてくれるドラマで、視聴者がドラマを通じて体感できることに大きな意義がある内容だ。

○　１０月１８日(金)のドラマ１０「ミス・ジコチョー～天才・天ノ教授の調査ファイル～」を見た。男性でも成り立つ内容だが、主人公の工学者が女性に設定されていて好感が持てた。研究者、科学者を取り上げる際は、風変わりな面だけを強調しすぎないように描いてほしい。

○　ＮＨＫはアメリカのドラマをよく放送している。最近は、動画サイトでも数多く海外ドラマを配信しているので、今後どう差別化していくのか興味がある。
　アメリカのドラマはクロスオーバーが盛んで、いろいろなドラマのキャラクターが違うドラマに出るということが行われている。ＮＨＫのドラマは充実しているので、同じような取り組みを行ってもおもしろいのではないか。

○　９月３日(火)の前山田×体育のワンルーム☆ミュージック「スマホ・パソコン１つで音楽をクリエイト！」と９月１０日(火)の「スマホ・パソコンで音楽をクリエイト実践編」（Ｅテレ 後 10:50～11:19)を見た。楽譜が読めなくてもスマホ１台で作曲し、グローバルに活躍できるということがリアルに伝わる内容だった。「ワンルーム」という番組のタイトルが誇張ではなく、本当にそのような世界から生まれていることが伝わってきた。最新の音楽とは何か、若い世代はどのような行動をしているのかが分かる内容で、音楽好きの世代にも興味を持ってもらえる番組だったのでないか。会話の雰囲気も岡崎体育さんらしく、好感が持てた。

○　１０月３日(木)からＥテレで放送が始まった「ソーイング・ビー」という番組を見ている。洋服を作る過程を見ることができ、役立っている。一方で、この番組がＮＨＫで放送されていることは、まだあまり知られていないのではないか。ハンドクラフトやハンドメイドは好きな人も多いので、見たい人や興味のある人にどう伝えるのかがＮＨＫの課題だと感じた。

○　９月２１日(土)のスポーツ酒場“語り亭”「女子マラソン　五輪をかけた“勝負のポイント”」、１０月１７日(木)の「ラグビーワールドカップ２０１９　祝！日本代表　悲願のベスト８進出」を見た。選手の活躍を見て、そのスポーツを好きになる人もいる。そういったファンの人たちに引き続き興味を持ち続けてもらうために、スポーツの楽しさを分かりやすく解説する番組は大切だ。どうすれば世界に通用するのかといった難しい切り口の番組だけでなく、この番組のようにリラックスして見られるということも重要な要素だと思う。

○　１０月１５日(火)のＢＳ１スペシャル「あなたの隣の奇跡　地域を動かした人々の物語」（後編）を見た。地域をけん引する人たちの姿が描かれており、明るい気

持ちになった。

○　１０月２０日(日)の「ザ・ベストテレビ２０１９　第一部」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後0:00～4:29)を見た。名古屋テレビ放送が制作した「葬られた危機～イラク日報問題の原点～」を見た。前から関心がある番組だったので興味深く見た。民放が制作した番組も放送していた点は驚いた。

○　2018年４月２４日(火)のクローズアップ現代＋「郵便局が保険を“押し売り”！？～郵便局員たちの告白～」について、2018 年５月１４日の番組審議会で意見を述べたが、今回報道内容の正しさが証明され、事態の深刻さが顕在化したといえるのではないか。改めてＮＨＫには放送法に基づき、公共放送の役割や責任をしっかりと踏まえた上で国民の疑念を招かぬよう、放送の自主自律を堅持し、不当な干渉、介入を排除し、報道の自由を守ってほしいと強く思う。

（ＮＨＫ側）

かんぽ生命の問題については、「クローズアップ現代＋」のホームページで見解を発表している。引き続きこの問題について説明責任を果たしていきたい。

○　かんぽ生命の報道に関しては、視聴者はＮＨＫが毅然（きぜん）とした態度でよい番組を制作し続けていくことを期待している。今後も取材を続けてよい番組を制作し、視聴者の信頼を得ていってほしい。

○　「クローズアップ現代＋」のかんぽ生命の不正販売問題について、ウェブで動画などを使い、視聴者に情報提供を求めた際、昨年８月に続編を目指しているとしていたが、結果的に続編の放送は見送っている。その際、視聴者に何らかのお知らせは行ったのか。

（ＮＨＫ側）

昨年８月に続編を放送するというのはあくまでも目安で、公式に発表したものではないことから、対外的な説明は行っていない。昨年８月の時点では、引き続き、取材を継続し放送を目指すことにした。

○　昨年８月に続編の放送を見送った時点で、視聴者に対する何らかのお知らせが必要ではなかったか。通常の取材の手法で番組を作る過程においては番組をどう完成

させ、いつ放送するかは作り手側の判断の下にあると思う。しかし、オープンジャーナリズムという手法は視聴者に取材に参加してもらっている。人によってはリスクを冒し、あるいは勇気を出し、情報提供をした方もいただろう。そういう方々にとって、自分たちが寄せた情報はどうなったのだろうかという思いがあったに違いない。その情報がどうなったのかを知らされないまま、結果的に１年間待つことになった。１年は長すぎるのではないか。

（ＮＨＫ側）

オープンジャーナリズムという手法は手探りで進めている。取材のプロセスを一部公開しながら行う新しい試みで、試行錯誤しているところだ。情報を提供してくれた方には、個別にフォローを行った。インターネットを使った取材手法は今後も検討を重ねていく。

○　今回の経緯をたどるならば、抗議してきた側の要請を簡単に受け入れてしまったＮＨＫ経営委員会に問題があると思う。公表された動画を見たが、問題意識を構え視聴者にしっかりとした情報提供を求める内容だった。その報道姿勢はひきつづき堅持してほしい。

○　台風１９号に伴って、一晩で同時多発的にさまざまな被害が発生した。そのような中、テレビ画面が一時情報過多に陥っていたという気がする。画面の左側に「台風１９号関連」という大きな表示があり、その下に災害関連情報につながる２次元バーコードがあった。また、画面上部には文字が流れていた。その最中にニュース速報が出ると、速報チャイムが鳴り、速報スーパーが画面に表示される。速報チャイムに驚いて画面を見ても、速報がどこに表示されているのか分からない状態で、困惑することがしばしばあった。今回の台風は非常に強力でしかたがない面はあったかもしれないが、速報を流す基準などは臨機応変に変更してもよかったのではないか。アナウンサーも的確に情報を伝えていると思うので、視聴者を混乱させない画面作りを考えてほしい。

○　オープンジャーナリズムの手法で意見を募ると、いわゆるタレコミのような情報もある。公共放送であるＮＨＫがこの手法で取材を続けることはよいと考えているのか。また、ＳＮＳ上に掲載されているコメントをニュースでも紹介しているが、その都度発信者に接触し発言の主旨や意図を確認しているのか。

（ＮＨＫ側）

オープンジャーナリズムは、情報を募るだけのものから、取材プロセスや成果を見せ、さらに追加の情報を求めるというところまで、さまざまな段階がある。自分たちだけで取材を行う以上に、さらに広く取材を進められる可能性もあるので、ひきつづきこの手法を追求していきたい。

（ＮＨＫ側）

個別のニュースでのインターネット上の反応については、投稿者本人にも確認し、紹介するというのが原則だ。しかし、例えば選挙などでビッグデータを使い、どのような声が出ているかを紹介する時などは、必ずしもすべての人に確認するというわけではない。

（ＮＨＫ側）

番組の公式ＳＮＳで呼びかけることもあれば、一般的に話題になっているキーワードや内容を取り上げることもある。個別のケースによって、具体的に紹介することもあれば、一般的な声として紹介することもある。

○　台風報道はＮＨＫを１日中見ていた。役に立つ内容だった。台風の前は、事前に「ＮＨＫニュース・防災アプリ」をダウンロードするよう、ほかのメディアとも連携して、さらに呼びかけるとよいのではないか。

○　台風１９号の報道に際して、現場から実況をしたアナウンサーがゆっくりはっきりと短いことばで明瞭に事実を伝えていた。あえて、感性に訴えていない伝え方が非常によかった。

○　台風１５号のときは各地の被害状況が伝えられたあと、消費者被害に関する報道もあったが、台風１９号のときは被害が大きく消費者被害のところまで報道できていないように感じた。消費者被害を未然に防ぐことも重要だと思うので、消費者庁の消費者ホットラインも周知してほしい。台風１９号に関するＬ字放送は具体的な内容で、大変役に立つ内容だったと思う。

（ＮＨＫ側）

台風報道時の消費者被害を防ぐための周知に関する指摘は現場に伝える。

○　インターネットの情報も注意してみているが、ＮＨＫの災害に関する情報提供のスタイルが深まったと感じる。たとえば、「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」のトップページに、被災した各県ごとに生活情報が詳細に掲載されている。テレビの画面は情報が多すぎて分かりづらい面もあるが、「ＮＨＫニュース・防災アプリ」「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」といったサイトは情報が集約されていてよい。2016 年の熊本地震に際しては、マスコミは多くの視聴者に向けた情報を提供できる態勢がある一方で、被災者の生活に関わる丁寧で細かい情報を集約し届ける機能を若干欠いていると感じていた。しかし、今回は被災者が知りたいと思うきめ細かな情報が提供されていた。

○　台風１９号の時は、「ＮＨＫニュース・防災アプリ」をダウンロードし、活用した。テレビの画面にいろいろな情報を乗せるのはかなり厳しい面があると思うが、そのような中でウェブでの情報発信がうまく活用されていた。鉄道の路線情報など、いろいろな情報が的確に出ていた。有用な情報を的確に広く提供できており、ウェブの活用の重要性を改めて感じた。

○　９月にパラ競泳世界選手権２０１９、１０月に車いすラグビーワールドチャレンジ２０１９、１１月にパラ陸上世界選手権２０１９と、パラリンピック競技関連の放送が続く。これまでパラスポーツの世界選手権がこれほどきちんと放送されることはなかった。すばらしい取り組みだ。１０月２０日(日)の「車いすラグビーワールドチャレンジ２０１９」(ＢＳ１　後 4:00～5:49)を見た。おそらく日本が決勝に進出すると想定して、午後４時からの編成を組んでいたかと思うが、残念ながら日本は３位決定戦に回ったため、同日の１２時から行われた試合を録画で放送していた。日本の試合は見られたが、決勝戦のオーストラリア対アメリカ戦の高いパフォーマンスも見たかったというのが正直なところだ。同日の夜に総合テレビで放送された「ラグビーワールドカップ２０１９」(総合　後 6:20～6:44、総合サブチャンネル　後 6:44～7:10、総合　後 7:10～9:50)の日本対南アフリカ戦の実況は偏りがなく、共感できた。東京パラリンピックの放送でも、自国に偏りすぎることなく、世界から来ているパフォーマンスの高い選手たちの姿も放送してほしい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年９月ＮＨＫ中央放送番組審議会

９月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１２人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、２０１９年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、２０２０年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。

続いて、有吉のお金発見　突撃！カネオくん「意外と知らない“新幹線”のお金の秘密」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
木村たま代（主婦連合会消費者事務局長）
栗原　友（料理家）
柴田　岳（読売新聞東京本社常務取締役論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜「２０１９年度後半期の国内放送番組の編成」および「２０２０年度の番組改定」について＞

○　最近、ＮＨＫのドラマが非常におもしろい。ドラマ１０「ミス・ジコチョー～天才・天ノ教授の調査ファイル～」は女性の工学エンジニアが主人公ということで、とても期待している。

○　大学の理工系学部に進学する女性は、比較的少ない。工学分野は卒業後も含め、

具体的なイメージを描きづらい分野なので、ドラマという形で取り上げることで、多くの人に知られるよいきっかけになると思う。

○　よるドラ「決してマネしないでください。」も理系の学生が主人公なので、定番のストーリーのようにも思うが、非常におもしろそうだと期待している。

○　民放のバラエティーの手法を取り入れて制作することで、より身近なＮＨＫにしていこうという姿勢が感じられる。番組に、さらにＮＨＫらしい工夫を加えてほしい。

（ＮＨＫ側）

演出方法は今後も検討を重ねていきたい。

○　スポーツは、多面的に捉えることによって順位や勝ち負けだけではないおもしろさが見えてくると思う。ドラマチックに描きすぎるとスポーツの本質とかけ離れてしまうこともあるので、バランスを取りながら放送すると視聴者もより楽しめるのではないか。

○　東京オリンピック・パラリンピックでは、日本の選手の活躍も見たいが、日本の選手が出場していなくても、世界最高のアスリートたちがすばらしい勝負をする競技も見たい。主な種目の決勝戦などを見られるような編成を心がけてほしい。

（ＮＨＫ側）

来年度の東京オリンピック・パラリンピックについては、どのような編成にするかを検討しているところだが、いただいたご意見は参考にさせていただく。

○　日本の選手、海外の選手にとらわれず、同じような視点でバランスよく放送するとよいと思う。

○　以前、ＮＨＫスペシャルで放送していた「ミラクルボディー」シリーズは、代表選手の体の機能に焦点が当てられていて、非常に興味深かった。この番組を見て、日本の選手が出場していない競技も見るようになった。このような番組もあるとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

来年の東京オリンピック・パラリンピックでも「ミラクルボディー」のような、スポーツを多角的に見ることができる番組を検討している。

○　「人間ってナンだ？超ＡＩ入門」と「フランケンシュタインの誘惑Ｅ＋」というＥテレらしい教養番組が終了する。多くの方に見ていただけるようバラエティー的な演出にしたり、難しい内容を分かりやすくしたりするという視点は大事だが、しっかりとした教養が身につく番組も引き続き放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

人気のある番組でも、半期ごとの放送になる番組もある。指摘は今後に生かしていきたい。

＜有吉のお金発見　突撃！カネオくん
「意外と知らない“新幹線”のお金の秘密」
（総合　７月１３日(土)放送）について＞

○　クイズ形式の番組としてはおもしろみに欠けたように思う。日本の新幹線の運賃は海外の鉄道と比較すると非常に高い。お金をテーマにするのであれば、新幹線の運賃に焦点を当て、世界の高速鉄道と比較するような内容を見たかった。

○　新幹線というテーマは視聴者に受けいれられやすく、新幹線が好きな方にとっては意義のある番組になっていた。有名な話もあったが、丁寧に映像化されていたように思う。新幹線の話題が多様に紹介され、知りたいことを知ることもでき感銘を受けたが、番組のテーマであるお金の秘密、お金事情としてさまざまな事象を読み解いていく内容になっていたかは疑問だ。今起きている経済の仕組みを、さまざまなおもしろいテーマと結びつけて分かりやすく解説する番組に期待したい。今回は、新幹線のおもしろさだけで番組ができているかのような印象を受けた。

○　見ていて肩の凝らない番組で、生活に身近な新幹線を取り上げていたのがよかった。お金という観点でみると、どんな話題があったのか全く印象に残らなかったが、新幹線に使われている技術的工夫やバッテリーの仕組みなどを解説する内容で十分だったのではないかと思う。司会の有吉弘行さんは、ほかの番組で見せる雰囲気とは違っていたように思う。番組が比較的真面目な内容だったからかもしれないが、

一部のゲストの服装が気になった。

○　新幹線の多面的な内容についてバランスよく構成され、テンポよく番組が進行していたように思う。ファミリー層を対象に、気楽に見られるバラエティー番組だと感じた。正確で快適な運行のために働く人たちの努力などを効果的に伝えており、人に焦点を当てた番組作りについては好感が持てた。しかし、他の回では、お金を切り口にしながら意外性や驚きを伝え、そこから社会の仕組みを理解できることが多く、今回はやや新鮮さが感じられなかった。リニアモーターカーや新型車両の導入は話題になると思うが、今回は企業の宣伝色が強いようにも感じた。この番組は、お金が鍵となる番組だと思うので、どういう視点でお金を切り口に迫っていくか工夫することが重要だと思う。テーマの選び方について深く検討していくと、より楽しい番組として定着するだろう。

○　今回は他の回と比較し、お金の比重が少なかったように思う。夏休み前の放送だったので、子ども向けに制作したのだろうと感じた。３０分という放送時間は、子どもと一緒に見るには適切で、家族で安心して楽しめる内容だった。お金だけでなく、それも含めた社会学習という点では、番組のねらいどおりだった。お金を扱う時もＮＨＫらしく洗練された内容にすることで、さらに番組が定着していくのではないか。お金の教育は大変重要なテーマだと思うので、そのことにも比重を置きながら番組を制作してほしい。

○　教育現場ではお金の話は若干タブー視される傾向がある中で、家族でお金の話ができるようなテーマを選んだことや一つのテーマから深掘りできることを伝える意味ではよい番組だ。今回初めてこの番組を見たが、ＣＧキャラクターとのかけ合いや子役をＭＣに起用している点を見て「チコちゃんに叱られる！」と似ていると思った。「チコちゃんに叱られる！」は質問の作り方がすばらしいと思う。日常的な疑問を取り上げることがおもしろさにつながっている。また、回答にも意外性があり、好奇心がくすぐられる。岡村隆史さんとチコちゃんの距離感や関係性も絶妙だ。この番組には、有吉さんに対して突っ込む役割が必要なのでないかと思った。そのような相手がいると番組のテンポも変わるのでないか。制作者も、出演者も「チコちゃんに叱られる！」を意識しているようだが、「チコちゃんに叱られる！」がなぜヒットしたのかをプロの視点で分析し、役立てることは非常に重要だと思う。しかし、二番煎じになってはＮＨＫで制作する必要はないので、この番組らしいオリジナルの要素が盛り込まれることを願っている。

○　子どもからお年寄りまで一緒に見られる楽しい番組だった。番組タイトルを聞く

と、お金や数字に特化した内容かと思ったが、雑学を紹介する番組だった。肩ひじを張らずにリラックスして見ることができた。日本の新幹線の運賃は高いのか安いのかといったことや、新幹線車両の変遷、子どもたちに人気のあるドクターイエローの製作費など、より興味がわくことも伝えられたらもっと楽しかったのでないか。番組で紹介された情報はほとんど知っていることだったが、確認しながら見て楽しむことができた。

（ＮＨＫ側）

今回は夏休み前の放送だったこともあり、子ども向けに制作した。街頭でインタビューを行い、意外と知らない秘密を掘り下げるテーマを設定した。視聴者のみなさんが気になっていることを掘り下げていくことが番組の目的の一つだ。

○　一つ一つの内容に対し、逐一お金に関する話題を盛り込んでほしかった。また、次に新幹線に乗ることが楽しみになるような、新しい発見が紹介されるとよかった。お金が切り口の番組であれば、番組の最後に紹介された元国鉄職員のコレクションに費やしたお金などについても、もっと知りたかった。

○　普段からこの番組を見ているが、比較的無難な回だったように思う。取り上げている内容によっては、エッジが利いてテンポもよい回もあったが、今回は情報に既視感があり、新鮮味に欠けた。お金、クイズ、バラエティーという掛け合わせは昔からよくあるが、この番組は、バラエティーという要素が強いと感じた。３０分という放送時間は適切で、楽しく見ることができた。意外な知識を得ることもでき、よくまとまっている番組だ。一方で、千鳥のノブさんのナレーションに頼っている面は大きいと思う。彼のナレーションをもっと生かしていかないと、番組の定着は難しいのではないかという印象を受けた。

○　普段から娯楽番組の一つとして楽しく見ている。お金を切り口にしながら、企業や組織の工夫を伝え、その工夫により世の中が成り立ち、快適さや便利さが生み出されているということを描く番組だと思っている。今回は、鉄道好きの人間からすると、少し物足りないような内容だった。世の中には、何とか採算を維持しながら自らの財源で運営している社会的に意義の大きい事業が多くある。娯楽番組の要素はなくなってしまうかもしれないが、フードバンクや子ども食堂、山間地の移動購買車や離島の病院などのお金事情を取り上げると、人々の興味関心も広がり良いと思う。

（ＮＨＫ側）

なぜ採算が取れているのか疑問に思うことや、どういう仕組みになっているか分からないことを娯楽番組としてどう紹介していくのかは、重要な課題だと思っている。

○　新幹線の清掃の話やバックヤードの話は知っている内容だったが、番組が進むにつれてマニアックな話が出てきて、家族と盛り上がりながら視聴することができた。初めて知る情報もあり、車両やグッズの再利用という意味での物の価値がどの程度で、それがどう生かされているのかが分かってよかった。視聴者の興味によってテーマ選びは難しいと思うが、お金という切り口で、親子で話すきっかけになる番組ではないかと思った。番組に出演している田牧そらさんが新幹線の清掃を行い、プロと比較する場面があったが、プロの清掃の方は大人の女性で年齢も体格も違う。本当にプロの仕事のすごさを表現したいのであれば、大人の男性と比較してもよかったのではないか。掃除は女性がするものと受け取られないか気になった。ジェンダーバランスも考えてほしい。

○　プロの清掃との比較対象として、田牧さんに清掃をさせていたことに疑問を持った。彼女のキャラクターは番組全体を柔らかくしていて、良いキャスティングだと思う。しかし、清掃の場面では、子どもなのだから大人と比較して遅いのは当然だと思う。比較することで清掃員のすごさを伝えるのであれば、大人の男性でもよかったのではないか。内容については、鉄道ファンからすると物足りない内容だったが、一般視聴者向けの内容になっていたとは思う。

（ＮＨＫ側）

番組でお金を露骨に取り上げると下品になるので、キャラクターを可愛らしくするなどして、バランスを考えている。今回の意見を聞いて、もう少し踏み込んでもよいのではないかという感想を持った。

○　だれにでも身近で、興味のあるお金を切り口にし、社会学習を提供している。お金にまつわるバラエティーとしては、上品で知的に感じた。今後もメジャーからマイナーまで幅広いテーマで番組を制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

テーマの選び方や掘り下げ方については、今後も検討して

いきたい。ＮＨＫらしさを加えながら、家族で楽しめる要素を入れ、放送していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　８月１２日(月)のＮＨＫスペシャル「かくて“自由”は死せり～ある新聞と戦争への道～」(総合 後 10:00～10:49)を見た。なぜ戦争に突き進んだかをテーマにしていたが、今後にもつながる大事な視点だと思う。１０年分の「日本新聞」の分析や、若い音楽の先生が自由教育から国粋主義者に傾倒していく様子を通して、戦争に向かっていった時代をどう受け止めるべきか考えさせられた。

○　８月１５日(木)のＮＨＫスペシャル「全貌　二・二六事件～最高機密文書で迫る～」(総合 後 7:32～8:45)を見た。二・二六事件の全貌と真相に迫る力作だった。海軍の最高機密文書より、さまざまな新しい事実が発掘されていた。事件前から海軍は陸軍内部の不穏な動きをかなり正確に把握していたこと、陸軍内だけでなく、陸軍と海軍との関係においても内戦寸前の深刻な事態に直面していたこと、昭和天皇の苦悩と決断の経過、虚々実々の関係者間のやりとりなど、相当複雑な動きを丹念に分かりやすく映像化していた。当時の臨場感、緊迫感がストレートに伝わるよい番組だった。番組最後の「不都合な事実を隠し、自らを守ろうとした組織の姿」というメッセージは、まさに今日発信すべき意義を強く感じた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「全貌　二・二六事件」は新資料を基に番組を制作した。海軍にあのような資料が残っていたことも驚きだが、組織の問題にも触れようと考え、最後にあのようなメッセージを入れた。

○　８月１７日(土)のＮＨＫスペシャル「昭和天皇は何を語ったのか～初公開・秘録“拝謁（はいえつ）記”～」を見た。日本人として知っておくべきことをテレビという媒体を通じて分かりやすく伝えている番組だった。昭和天皇や周囲の方々のご苦労、工夫など、改めて学ぶ機会となった。

○　９月１日(日)のＮＨＫスペシャル「巨大都市　大停電～“ブラックアウト”にどう備える～」を見た。都市部の停電に絞った切り口はよかった。映像メディアは災害に関する啓発力や訴求力があり、今回の番組のようにシミュレーションＣＧや再

現ドラマなどで伝えていくことは重要だ。着眼点はよかったが、番組が短く物足りなく感じた。番組前半で北海道地震の検証に時間を割いていたが、都市部についてもどう対応するべきか同様に検証すると番組に深みが出たと思う。防災関連の番組は、教育現場での活用もできるのではないかと思う。今後も、掘り下げた内容を期待したい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「巨大都市　大停電～“ブラックアウト”にどう備える～」は、後半部分の内容を深め切れなかったかもしれない。今後もさまざまな形で防災の番組を制作していきたい。

○　９月８日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　スペース・スペクタクル第３集「はやぶさ２　地球生命のルーツに迫る」を見た。小惑星リュウグウに着陸し、地下物質を採取し、人類のルーツを探るという話はロマンがあり、ＮＨＫらしい番組だった。

○　８月９日(金)の「どすこい！夢の大相撲～令和元年ＡＩ場所～」(総合 後 7:30～8:42)と、６月１６日(日)に放送されたＮＨＫスペシャル「モネ“睡蓮”～よみがえる“奇跡の一枚”」を見た。いずれもＡＩをテーマにした番組だったが、「どすこい！夢の大相撲～令和元年ＡＩ場所～」は、力士の特徴を組み合わせたビジュアルが非常におもしろかった。ただし、過去のデータだけでなく、ゲストの戦略も加えてしまっていたので、本当に歴代最強を決める勝負だったか疑問が残った。データのみで対戦させる、もしくは相撲の理論とデータを組み合わせきちんと分析した上で戦略として盛り込む、どちらかの演出にしたほうがよいと思った。どの競技でも歴代最強を決める試合は見たいと思うので、他の競技にも展開してほしい。

一方で、ＮＨＫスペシャル「モネ“睡蓮”」は、ＡＩと人間の技術で構成しており、ＮＨＫならではの番組だった。技術による復元が待ち望まれる作品は多くあるが、今だからこそできたプロジェクトだと思った。ＡＩは万能ではないし、人間も万能ではない。ＡＩの解析と人間の英知が組み合わさり、どのような世の中になっていくかは、まだ誰にも分からない。ＡＩと人間の共存が議論されるなか、よいテーマ設定の番組だった。高精細なものを追求できたという点においてもＮＨＫならではの番組だった。

（ＮＨＫ側）

モネの復元は、最初にＡＩだけではできなかったので、人

間の知恵、つまりアナログの手法も使い復元した。未来に向け、ＡＩと人間はどうかかわればよいかという深いテーマを読み解いていただき、ありがたい。

○　８月１５日(木)の世界の哲学者に人生相談「コンプレックスだらけの自分を好きになる～デリダ」を見た。ゲストの和田アキ子さんのありのままの自分でよいという考え方と“コンプレックスだらけの自分を好きになる”という番組テーマが合致しており、よい内容だった。

○　８月１９日(月)の宇宙の人気番組「新銀河紀行～驚異の地球文明～」(総合 後10:00～10:50)を見た。細かな演出が行き届いた番組だった。滅んでしまった地球の文明を、宇宙人が一つ一つ理由付けをしながら読み解く内容は、そのジャンルに興味のない人でも分かりやすく理解でき、よい番組だった。今後も放送してほしい。

○　宇宙の人気番組「新銀河紀行～驚異の地球文明～」は、新しい発見もありおもしろかった。知らないことに気づかせてくれる番組だった。出演者が宇宙人の格好をすることを嫌がらないのか気になったが、今後も続けてほしい番組だ。

（ＮＨＫ側）

宇宙の人気番組「新銀河紀行～驚異の地球文明～」は、我々にとっては常識でも、地球外からの視点で見ると、新しい捉え方ができるという教養エンターテインメントを目指した。

○　８月２５日(日)の「ごごナマ　パラリンピック１年　前スペシャル」(総合 後1:50～3:00、3:05～5:55)を見た。長い番組だったので、どの種目をいつ紹介するか、視聴者がわかるような工夫をしてほしかった。

○　台風の影響が心配だったので、９月９日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を朝７時から見ていた。その中で外出する人向けに、スマートフォンで得られる情報について説明をしており感心した。丁寧な報道だ。

○　総合テレビなどで放送している「五郎丸歩が語るラグビーワールドカップ」で五郎丸さんがラグビーを取り上げ、外国人選手も紹介している。ラグビーにあまりなじみがないが、番組を見て、おもしろいと感じた。よい内容だと思う。

○　８月８日(木)の特集ドラマ「マンゴーの樹の下で～ルソン島、戦火の約束～」(総

合 後 10:00～11:13)を見た。ＢＳプレミアムでは完全版を放送したようだが、地上波しか見られない人もいると思うので、地上波でも完全版を放送してほしい。

○　８月は戦争と平和を考える番組が多かった。８月４日(日)のＢＳ１スペシャル「マンゴーの樹の下で～こうして私は地獄を生きた～」(BS1 後 10:00～10:50、後 11:00～11:50)は、生き残った人たちの貴重な証言や手記を元に番組が制作されていた。想像を絶する過酷な状況に追い込まれた人たちの姿を克明に浮き彫りにし、戦争の悲惨さや平和の大切さをストレートに訴える番組だった。一方で、ドラマの部分は軽く感じた。ＮＨＫは、戦争と平和、核兵器のもたらす悲劇について、国民が考え続けるための素材を伝え続ける責務があると考える。令和の時代、ますます戦争の記憶が遠ざかる中で、８月を中心に公共放送の役割の重さをあらためて実感した。

（ＮＨＫ側）

特集ドラマ「マンゴーの樹の下で～ルソン島、戦火の約束～」は、ＢＳ１スペシャル「マンゴーの樹の下で～こうして私は地獄を生きた～」で取材した人たちの証言を元に制作した。今は戦争を知らない世代が増え、戦争をどう伝えるのかが課題だと考えている。ドキュメンタリーとドラマという異なる手法で、より多くの人に伝えようと考えた。ＮＨＫスペシャル「＃あちこちのすずさん～教えてください　あなたの戦争～」など、今夏は、戦争を伝えるためのさまざまな試みを行った。ドキュメンタリーと比較するとドラマが軽く見えてしまうという指摘については、今後の参考としたい。

○　よるドラ「だから私は推しました」は現代の若者文化の実相に迫る挑戦的なドラマだ。最近のＮＨＫのドラマは、若い制作者が新しい視点で制作しているように感じる。一方で現代ドラマだけでなく、近年少なくなった良質な時代劇についても制作を続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

よるドラ「だから私は推しました」は承認欲求が強すぎて生きづらいなどの現代ならではのキーワードが満載のドラマになっている。若いプロデューサーが新しい切り口にチャレンジしているドラマだ。

○　８月５日(月)・１２日(月)・１９日(月)・２６日(月)の１００分ｄｅ名著「ロ

ジェ・カイヨワ“戦争論”」を見た。８月は日本人にとって戦争を考えるときなのでよい題材だった。戦争に加担しようとは誰も思っていないが、内なるものが戦争を作っていると理解するべきだということばは納得できた。

○　８月８日(木)のフランケンシュタインの誘惑Ｅ＋＃３「水爆　欲望と裏切りの核融合」を見た。この番組は科学者に焦点を当てた番組だと思うが、よくこの時期にこの内容を再放送したと感動した。このように少し難しいと思われる内容を扱う教養番組を、今後も制作してほしい。

○　８月２６日(月)のスポーツ×ヒューマン「帆を張れ　ふたりの心に　セーリング吉田愛・吉岡美帆」を見た。順位だけでなく、細かな競技特性を伝えることは、楽しみ方が増え、競技のファンが増えることにもつながると思う。多くのアスリートを取り上げ、スポーツをさまざまな角度から取り上げることは、選手やスポーツ関係者にとっても喜ばしいことだと思う。

○　８月３１日(土) 勝利の条件　スポーツイノベーション「東京オリンピックで勝つ！女子マラソン！日本代表を選ぶＭＧＣ」を見た。マラソングランドチャンピオンシップ(ＭＧＣ)女子の優勝候補３名を増田明美さんが紹介する番組で、２位までに入れば東京オリンピック出場選手に内定するレースの注目点などを分かりやすく解説していた。これに限らず、スポーツは、ドラマチックになりすぎないように本質を伝え続けてほしい。

○　９月４日(水)の英雄たちの選択「渋沢栄一　知られざる顔～『論語と算盤（そろばん)』を読み解く」を見た。渋沢さんはビジネスの面ばかり取り上げられることが多いが、今回は社会的意義のある役割を果たしてきたことも取り上げておりよかった。ビジネスと社会性の両立を期すのは日本の伝統だと思う。番組では両方の切り口で取り上げることができていた。

○　９月７日(土)の英雄たちの選択スペシャル「ローマ帝国×驚異の砂漠都市　幻の王国サバイバル戦略」の再放送を見た。ヤマザキマリさんが出演していた。ヤマザキさんは確かシリアに住んだことがあったと思うが、せっかくシリアの話をしているのに、司会の方が日本の話に引き寄せていた点が残念だった。分かりやすく、おもしろいが、歴史の出来事を他の国や時代にあてはめることほど危険なことはない。世界を広く見ることが基本にあるべきだと思う。

○　ＢＳプレミアムで「着信御礼！ケータイ大喜利」　が復活したことに興味を持っ

ている。以前放送していた時と同じような盛り上がりを見せるのか気になる。今の時代の雰囲気やこれからのユーモアの雰囲気を見るにはよい。

○　若者や中高年の引きこもりなど、社会との関係をうまく築けない人を番組で取り上げる場合、応援し励ますことにもなれば、結果的に本人たちをますます追い詰めることにもなりかねない。その両面を考えながら今後も取り上げてほしい。

○　京都アニメーション放火事件の実名報道の際のＮＨＫの見解は、名前を公表されたくない家族の不安な気持ちを十分に考慮した内容だっただろうか。マスコミだけが発信する時代ではない。誰でも簡単にインターネット上で真偽が定かでないさまざまなことを拡散できる時代になっている。それを踏まえた見解を述べてほしかった。

（ＮＨＫ側）

実名報道については、事件の重大性や命の重さを伝えるために必要だと考える。その上で、遺族の方々の心情に配慮しながら取材した上で放送し、インターネットにも掲載している。今後も議論を重ねていく。

○　「ＮＨＫ政治マガジン」というホームページで、８月２１日（水）に「官邸への訪問記録を発見！ところが…」という記事を読んだ。大変インパクトのある内容だった。公開されてしかるべきさまざまな情報が存在しなかったり、もしくは公開できない、黒塗りということが横行している。さまざまな情報や公文書を記録し、適切に保管し、情報公開していくことは、国や社会にとってとても大事なことだ。今回、ＮＰＯ法人と連携し「官邸訪問予約届」を長期間取り寄せようとしたところ、ほとんどが墨塗りに変わってしまった。現場の恣意（しい）的な運用を感じさせる行為で、権力を監視する機能が成立しないと危険だと思う。ジャーナリスティックかつ重要なテーマを扱っており、この記事の調査報道的な手法は、新しいジャーナリズムのあり方を示唆するような内容だった。

○　フランスのビアリッツで開催されたＧ７サミットについては、イランの外相が電撃訪問するなど興味深い話題もあった。すべての報道をみたわけではないが、扱いがややあっさりしていたように思う。

（ＮＨＫ側）

Ｇ７サミットについては、サミット全体のテーマを伝えた

あとに、さらに詳細を報道し、イラン外相の訪問についても
伝えた。報道の仕方については今後も検証していきたい。

○　５分間で日本各地の風土や祭りなどを取り上げる「もういちど、日本」を見て癒やされた。松たか子さんのナレーションと音楽と映像が非常にきれいだ。ＮＨＫならではだと思う。

○　８月２５日(日)総合テレビの「サンデースポーツ２０２０」では義足走り幅跳びのマルクス・レーム選手がスタジオに生出演し、ＢＳ１では中村裕博士の半生を描いたドラマ＆ドキュメンタリー「太陽を愛したひと～１９６４あの日のパラリンピック～」(BS1　後 10:00～10:50、後 11:00～11:49)が放送された。レーム選手と中村博士の活躍は障害者スポーツにおいて大切な出来事であり、番組はどちらもよい内容で、人間性と情熱が歴史をつくるのだと感銘を受けた。しかし、この二つの番組が同じ時間帯の放送だったのが残念だった。時間をずらす工夫が欲しかった。さらに、事前の「サンデースポーツ２０２０」内でドラマ＆ドキュメンタリー「太陽を愛したひと～１９６４あの日のパラリンピック～」を告知する工夫なども検討してほしかった。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年７月ＮＨＫ中央放送番組審議会

７月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０１９年度第１四半期・４～６月）について説明があった。続いて、世界はほしいモノにあふれている～旅するバイヤー　極上リスト～「心が動く絵本を探す旅　イタリア・ボローニャ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)特別理事）
木村たま代（主婦連合会消費者事務局長）
栗原　　友（料理家）
柴田　　岳（読売新聞東京本社常務取締役論説委員長）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０１９年度第１四半期・４～６月）について＞

○　インターネットは１７指標で比較しているが変動はあまりないように思う。

○　前年と比較し、変動がないことをよしとするのかという問題はある。イベントの

あるなしに関わらず、ホームページの滞在時間は延ばしていったほうがよい。ＮＨＫのインターネットサービスは、滞在時間を延ばすためにどのようなことができるのか、どのようなコンテンツが必要なのか考えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ご指摘のとおり。インターネットサービスといってもさまざまなタイプのコンテンツがある。それぞれのサービスの可能性をさらに追求したい。

○　リーチが最も大きい総合テレビはＮＨＫの顔だが、「わくわく・ドキドキする」という質的指標が非常に低い。テレビはどんなものであれ「わくわく・ドキドキする」ことが基本にあると思う。今後どうしたらこの指標を改善することができるのか、中長期的な計画を作成し、さらにおもしろいものを作ろうという発想があってもよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

総合テレビのコンテンツの種類も影響しているのではないかと思っている。ＢＳプレミアムのように質的指標のグラフがきれいな円形になると美しいと思うが、さまざまな公共的使命を果たす中で、現状のバランスになっている。ご指摘を踏まえて、質的指標の改善に引き続き取り組んでいきたい。

＜世界はほしいモノにあふれてる～旅するバイヤー　極上リスト「心動く絵本を探す旅　イタリア・ボローニャ」（総合　６月１３日(木)放送）について＞

○　良質なコンテンツだった。番組が２５分から５０分になったことで、視聴者の見方に変化があったのか気になった。

（ＮＨＫ側）

２５分で放送していた時は、もう少し見たいという意見を多数いただいていたが、５０分になってからは、満足できる内容でさらに楽しくなったという意見を頂くようになった。一方、時間が長くなったことで、番組を最後まで見続けるには難しいという意見もいただいている。

○　くつろげる時間にゆっくり見るという意味ではバランスの取れた内容だった。しかし、トピックスに満載感があり、次々と話題が展開していく印象を受けた。それをよしとする向きもあると思うが、内容はよかったので、もう少しコンパクトな方が、若い人や忙しい人たちにとってはよいのではないか。コンパクトな内容を何回かに分けて放送するほうが視聴者も入り込みやすいと思う。

○　この番組には、紹介されたものを買いたいと思うカタログショッピング的な要素、登場するバイヤーや出演者に魅かれる要素、ＪＵＪＵさんや三浦春馬さんの掛け合いのおもしろさという三つの要素があり、それらが交互に示されながら番組が展開することで、飽きずに見てもらえるように工夫していると感じた。そうであるならば、以前の２５分の放送時間のほうが、気軽に見ることができてよかったのではないか。時間が長くなり真剣にのめり込んで見たが、内容に物足りなさを感じる部分もあった。以前の２５分の放送時間のほうが、見終わったあとの着地感がよかったように思う。

○　世界的に有名なボローニャのブックフェアの雰囲気や見本市に参加した人々の様子を魅力的に伝えていた。日本の編集者の絵本を選ぶ際の視点、各国の創造的でメッセージ性の高い絵本の紹介、絵本作家の創作への思いなど、さまざまな角度から多様な価値観を提供することができる絵本の魅力や奥深さをうまく引き出していたように思う。一方、さまざまな情報が次々と出てくるので、見ていて整理がつきにくかった点は残念だった。ＮＨＫらしい上質さがあり、そういう面では魅力的な番組だった。文化的背景も含め、ボローニャという都市自体の魅力をグルメ情報も交えながら伝えていてよかったが、東京のレストランでクイズまで実施し、スイーツを紹介するというシーンには違和感を覚えた。せっかく絵本を取り上げるのであれば、出演した編集者から日本の絵本事情を聞いたり、世界各国の絵本の特徴や各国の価値観がどのように絵本に投影されているのかといった点を深掘りしたりしてもらいたかった。

○　本というテーマは非常に難しかったと思う。３０代、４０代の女性を主なターゲットにするのであれば、年配の編集者と児童書作家という選択には違和感があった。せっかくテレビで絵本を取り上げるのであれば、もっと冒険してもよかったのではないか。５０分の放送時間であれば、ボローニャという街自体の魅力的な部分を紹介してもよかったと思う。番組の性質を考えると絵本よりもおいしい料理や変わったお菓子などを取り上げたほうが楽しめると思うが、心動く絵本を探す旅というテーマなのでバランスが難しかったのではないか。

○　今回取り上げた編集者や児童書作家は番組のターゲットとズレているように思う。編集者の仕事ぶりに興味を持つことができなかった。絵本の世界を知ることができたのは新鮮で、子どもの絵本選びの重要性にも気付くこともできたが、もう少し若い世代の編集者のほうが適任だったのではないか。また、ブックフェアの会場で児童書作家の夫妻に出会ったときも、番組の流れから考えると違和感があった。東京のレストランのシーンは、なぜ東京なのかという疑問は残ったが、おもしろかった。番組を見ていて、やはり長い印象を受けたので、東京のレストランを紹介し、「本」とは違うボローニャの「食」にもフォーカスしたのはよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

ずっと視聴し続けないと理解できないという番組ではなく、ザッピングする中でふと気になる情報に目が留まるという雑誌のような番組を目指している。コーナーごとに内容が浅くならないように努力はしているが、途中で視聴を止められないよう番組のなかでテーマを少しずつ変えているので、やや散漫な印象を与えたかもしれない。バイヤーの選定は、この番組で重要な要素だと考えている。今回は、Ｅテレで放送していて子どもたちに人気がある「おしりたんてい」というアニメの原作を担当している編集者を選んだ。３０代、４０代のターゲット層はお母さん世代でもあるので、児童書の編集者というのは共通項を見いだせると考えた。

○　ボローニャのブックフェアや今回紹介された児童書の専門店、図書館を訪問したことがあるが、番組ではボローニャの街、会場の雰囲気が非常によく表現されており、番組を通じて追体験することができた。編集者も多様なメッセージのある本を選んでおり、絵本の奥深さを伝えることができていた。一方、番組の本質的な評価とは離れるが、児童書作家が「Ｗｅｂ上で（物語を）読むよりも、アイデアが広がり情緒豊かになる」とコメントしていたが、紙だろうとデジタルだろうとよいものはよい。今の母親たちは紙の絵本も読めば、デジタル絵本も読む世代だ。あえて対比させる必要があるのかと気になった。ボローニャのブックフェアは最近デジタル部門も設けており、賞も出している。世界的にもデジタルと紙を融合したすばらしいコンテンツがボローニャからも生まれているので、フラットな視点を持ってほしいと思った。また、デジタルコンテンツとどのように付き合えばよいか悩んでいる母親もいるので、デジタル絵本のよさなどを紹介する番組も今後制作してはどうか。

○　日ごろ接することのない絵本の世界を見ることができたのは楽しく、個々の絵本

の紹介も大変興味深かったが、全体的に散漫な感じを受けた。しかし、番組の終わりで、ボローニャという街は子どもの４人に１人は親のどちらかが外国の人であるということを紹介しており、いろいろな人が集まり暮らすダイバーシティーの街だということが分かった。だからこそ、子どもたちがお互いを分かり合ういろいろなチャンネルが必要で、絵本もその一つということではないか。このことを最初に知っていれば、番組を違う視点で見ることができたのではないかと思った。一人の編集者と一つのイベントで５０分間をつなぐには、少し長い印象だった。

○ 絵本は子どもの教育目的だけでなく、大人が手に取りハッとする作品があるなど、絵本を楽しむスタンスは人それぞれの価値観でよいのではないかと思った。日本のアニメは世界的にも評価されているが、絵本はどうなのか気になった。

○　満載感、散漫な印象というのは私も同じ意見だ。さきほど雑誌のような番組を目指しているという話を聞き、自分自身にＮＨＫの番組は起承転結がはっきりしているという先入観があったため、散漫な印象を受けたのだろうかと思った。絵本が子どもの心を動かす要素についていくつか紹介していたが、人の気持ちを理解したり、つらいことや悲しいことに向き合ったりする豊かな心を絵本は育むものだと思った。日本では親による絵本の読み聞かせなどがあるが、ボローニャではどうなのかといったことや、絵本を通じた親と子どもの関係、コミュニケーションの取り方なども紹介してほしかった。また、絵本を読んでいるボローニャの子どもたちから直接話を聞くことができると、なおよかった。ただ、自分のなかの情緒的なものを深められる時間にはなった。

（ＮＨＫ側）

客観的な目線でたどるよりも、子どもたちが実際に絵本とどのように触れ合っているのかを描きたいと考えたが、取材上難しいところもあった。指摘は今後に生かしたい。

○　親が喜ぶためではなく、子どもがワクワクする感じを番組の中でどう伝えるのかとずっと気になりながら見ていた。最後に子どもと絵本の関係性が垣間見えるところがあり救われた。絵本と子どもの関係性が成り立ち、初めて絵本は評価されるものではないだろうか。子どもが絵本と触れ合う様子を描くことが難しかったと聞き、番組であまりその部分が取り上げられなかった理由が理解できた。

○　子どもが小さかったときのことを思い出し、心が温かくなった。絵本の不思議な魅力を感じることができた。絵本の絵は完成した１つの絵ではなく、ページをめく

りたくなる気持ちにさせるものだという説明が印象的だった。絵は完成されたものがほとんどだと思うが、そういう観点で挿絵は描かれているのかと新鮮な気づきがあった。ふだん５０分間テレビの前にいるのはつらいと思うが、雑誌のように興味のあるところだけ見るという観点ならば楽しめる番組だと思った。一方で、絵本自体をもう少し紹介してほしかった。世界の絵本はどのようになっているのか関心があったので、国によってどのくらい感覚が違うのかという観点が少なかったのは残念だった。最後の児童図書館の紹介は非常によく、日本にもそういった場所があるのだろうかと気になった。

○　番組の主なターゲットである３０代、４０代の女性以外の人にも響いていると思う。ボローニャが絵本の聖地といわれていることは初めて知った。赤ちゃんや子どもたちが安全、安心な環境で絵本に触れることができる場所、絵本の世界では先進的な場所ということが初めて分かり新鮮に感じた。絵本マーケットの中で自分の夢に挑戦する女性の姿は、番組のターゲット層である女性にも参考になったのではないか。子どもが寝て落ち着いた時間に“ながら視聴”するのであれば、番組コンセプトにもマッチしていると思う。子どもは絵本からだけでなく、絵本を取り巻く環境からも学んでいる。今回、番組で児童図書館が紹介されていたが、赤ちゃんが床で絵本を好きなように触れる自由な空間だった。あのような施設が日本でもこの先整備されるとよいと思った。

○　番組を見ながら、子どもが小さいときのことを思い出した。本屋でよい絵本を見つけ、喜ぶだろう、笑うだろうと想像したり、学ばせるために買って帰ったりしたことを思い出して懐かしかった。絵本の世界は今の私にとっては遠い世界なので、編集者の考えや「挿絵は未完成の絵」というキーワードなど、楽しく、リラックスしながら、知らない世界のことを知ることができる番組だった。

（ＮＨＫ側）

今後も雑誌のような番組を目指していきたいが、パートごとに内容をもう少し深めていきたいと思う。海外取材を行う番組なので、その街やそこに生きている人たちの息吹のようなものを伝えられるように、演出なども工夫していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月２３日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　スペース・スペクタクル　第１

集「宇宙人の星を見つけ出せ」を見た。２年前にＵＦＯだと考えられる物体が飛んできていたという話には驚いた。なぜメディアは、それを真剣に取り上げなかったのか、強い衝撃を受けた。解説も分かりやすく親近感が持てた。宇宙人だけでなく、宇宙船を地球に送り込めるほど進んだ社会もＣＧで見たかったが、今後が楽しみな番組だ。

○　７月７日(日)のＮＨＫスペシャル　恐竜超世界　第１集「見えてきた！ホントの恐竜」と７月１４日(日)の第２集「史上最強！海のモンスター」を見た。特に、第２集では、恐竜に関する新たな知見も紹介され、研究が進んでいることに感心した。恐竜が隕石によって滅亡する際のナレーションも、印象的だった。ＣＧで分かりやすい映像だったと思うが、目から入ってくる情報は強いインパクトを与えるので、どこまで本当なのか疑問に感じたところあった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「恐竜超世界」は２本シリーズで、ＣＧに力を入れて制作した。7,000 万年前の恐竜の世界を味わっていただくために、映像の描写については、最新の知見とそれに基づく推理も交えながら制作した。どこまで本当なのかという意見が視聴者からも出ていることは理解している。多くの方が疑問に思うだろうというところは、ＶＴＲの中で説明したりホームページで解説したりしている。ＣＧでいろいろな世界を味わっていただくところと科学的知見をどう折り合いをつけるかが課題だと思っている。引き続き、多くの方に関心をもってもらえるような演出で番組を制作したい。

○　７月２７日(土)ＮＨＫスペシャル「半グレ　反社会勢力の実像」を見た。目が離せなくなる内容で、よくあそこまで深く取材できたと思った。ナレーションで「半グレは一般人との垣根を限りなく低くしながらその勢力を拡大していた」と言い切っていたので、後で何か起こらないか、取材者は大丈夫かなどと心配になるほど半グレ集団の恐ろしさが伝わる内容だった。

○　ＮＨＫスペシャル「半グレ　反社会勢力の実像」を見た。綿密な取材の上に成り立つ、ＮＨＫらしい番組だった。こういった現実があることを知るのは重要だ。この問題は、掘り下げると根が深いように思う。社会の暴力化に対する問題提起は今後も行ってほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「半グレ　反社会勢力の実像」を見た。振り込め詐欺などさまざまな半グレがらみの話題が世の中にあるので、タイムリーな放送だった。ナレーションも半グレ社会の雰囲気をよく表し印象的だった。組織の実態についてＣＧを使い説明しており、一目瞭然で分かりやすかった。反社会勢力への取材は、取材対象との距離感やアウトプットにあたっての線引きなど、非常に難しく苦労することも多いと思うが、今後もひるむことなくこうした恐ろしい実態を見過ごさずに伝え続けることがＮＨＫには求められていると思った。

（ＮＨＫ側）

半グレの勢力が伸びており、一般の人たちを巻き込みながら犯罪が広がっているのではないかという問題意識の中で制作した。半グレ勢力の言い分について、どこまで信用し、どのような距離感で放送するかは難しいが、さまざまな検討を重ねたうえで放送した。今後も取材を続けていきたい。

○　７月２２日(月)のクローズアップ現代＋「京都アニメーション　世界に広がる支援の輪」を見た。事件後短時間で制作したと思うが、丁寧にまとめられていた。事件の検証だけではなく、なぜ京都アニメーションが日本の宝と言われ世界からも愛されているのかということを制作のプロセスに触れながら、作品の質の高さやクリエイターのすばらしさに焦点を当てていた点がよかった。また、クリエイターの家族、同じアニメ業界の方、国内外のファンという三つの視点が交差することにより、今この瞬間、世界の人たちがどう思っているかということがリアルに伝わってきた。引き続き京都アニメーションの作品の放送を期待するとともに、このような番組を通じて支援の場が広がることを願っている。

○　７月２３日(火)のクローズアップ現代＋「投票率５０％割れ　参院選　有権者のホンネは？」を見た。３０分という時間のなかで、国民の政治に対する本音、投票率の低さ、有権者の判断といったものが簡潔にまとめられていた。特に印象に残ったのは、若者の政治に対する価値観の変化だ。自分の生活スタイルと今の政治の仕組みのギャップにより、政治に対して関心がないわけではないが参画しようとしない現状を学生のインタビューなどを見て実感することができた。この問題点にフォーカスした番組を今後制作してほしい。

○　６月１２日(水)ごごナマ「発達障害　子と親と祖父母で考える」、６月２４日(月)あさイチ「どう向き合う？　思春期の発達障害」、６月２７日(木)ニュースシブ５

時「ＨＳＣ“敏感”すぎて苦しむ子どもたち」はいずれも分かりやすく明るくうまく伝えており、親に希望を与え、励ます内容だった。

○　６月２２日(土)のドラマ「聖☆おにいさん　第Ｉ紀」を見た。原作の雰囲気がしっかりと表現されていてよかった。ＮＨＫがこの作品を放送するという新鮮な驚きとうれしさがあった。世界の映画やテレビ番組だけでなく、ネット配信発のコンテンツも良質なものを選び放送することにより、ＮＨＫのコンテンツの幅が広がり豊かになると思うので今後も期待したい。

○　６月２３日(日)の明日へつなげよう「食べてみらんしょ～福島“田んぼの食卓”～」を見た。原発事故以降、今も厳しい状況が続く福島の農家のしなやかでたくましい努力が描かれており考えさせられる内容だった。また、６月２２日(土)のＢＳ１スペシャル「廃炉への道全記録２０１９　核燃料デブリとの闘いが始まった」では、放射性物質飛散のおそれもありながら懸命に誠意をもって廃炉作業を行っている人たちの姿が描かれていた。この２つの番組を対比すると、今後どうしていくべきなのか考えさせられるとともに、原発の稼働や新設には厳しい視線を持たざるをえないという思いが強くなった。今後もさまざまな視点での番組制作を期待したい。

○　外国人技能実習生についての問題をしっかりと取り上げていることについて、評価したい。中でも、６月２４日(月)のノーナレ「画面の向こうからー」(総合　後 10:50～11:20)は、２月３日(日)のバリバラ「外国人技能実習生は　いま…」の続編のような内容で、その後、改善されていないことを知ることができた。７月１３日(土)のＮＨＫスペシャル「夢をつかみにきたけれど　ルポ・外国人労働者１５０万人時代」や７月２１日(日)の目撃！にっぽん「荒海にかけた青春～外国人技能実習生の日々～」もその実情をよく伝えていた。このようなひどい実態は日本のイメージを悪くし将来にも尾を引きかねないと思う。番組で取材されているような人道に反することがなくなるまで、報道を続けてほしい。

○　ノーナレ「画面の向こうからー」と６月２７日(木)のクローズアップ現代＋「留学生が“学べない”３０万人計画の陰で」などでは、外国人労働者の問題の深刻さ、その問題の背景を明らかにしながら、改善の道をどう探るのかという形で、社会的意義の高い番組が放送されていた。特に７月１３日(土)のＮＨＫスペシャル「夢をつかみにきたけれど　ルポ・外国人労働者１５０万人時代」は極めて衝撃的な内容だった。ベトナム人技能実習生や留学生の深刻な実態を伝えながら問題提起をしており、目を背けてはならない内容の番組だったと思う。行政がどの程度具体的なアクションを取るのか、さらに踏み込んで追及するような調査報道を期待したい。

○　７月７日(日)これでわかった！世界のいま「海を越えて台湾にも…広がる香港デモの波紋」を見た。香港でのデモが台湾の総統選挙にも影響が出てくるのではないかという問題を報道していて、リアルタイムで世界が動いていることを感じられた。また、ＮＨＫがイスタンブールに支局を開設したということだが、トルコのように地政学的にもさまざまなテーマで重要度が増している国に支局を置くことで、迅速にさまざまな情報をまとめて伝えてくれることを期待している。また、日韓関係など国際的な課題も多くあるが、ＮＨＫには広い視野で、世界がいまどう動き、日本はその中でどう関係しているのかという視点で伝えてほしい。

○　７月１５日(月)の「秩父山中　花のあとさき・最終章～ムツばあさんの歳月～」(総合 後 1:20～2:50)を見た。人々や地域への思いが伝わってくる番組だった。また、この番組のなかで紹介していた「畑を山に返す」という発想を聞いて温かい気持ちになった。シリーズを最初から見たかったと感じた。良質な番組を蓄え、再放送できるのはＮＨＫのよさだ。ＮＨＫはさまざまな映像の財産があると思うので、それらを再構成し、心温まるものやワクワクする番組を制作してほしい。

○　６月２９日(土)のＥＴＶ特集「みかんの花が咲く谷で　豪雨から１年・農家たちの自叙伝」を見た。豪雨で壊滅的な被害を受けた愛媛県のみかん農家の人たちが、復興にむけて、苦労しながらも助け合う姿を丁寧に描いていた。取材を重ね、農家との信頼関係を築いたからこそ制作できた番組だと思った。

○　７月４日(木)バリバラ「教えて！マーシー先生　１限目」を見た。この番組のコンセプトは生きづらさを赤裸々に語りながらも笑い飛ばすということが主になっていると思う。しかし、今回はゲストが特におかしくないタイミングで大きな声で笑っているシーンがあった。薬物依存自体は笑えることではなく、場を盛り上げようとしているのかもしれないが、本当におもしろくて笑っているのかという疑問を視聴者に与えてしまうのはやりすぎ感があるように思った。

（ＮＨＫ側）

「バリバラ」は障害のあるなしだけでなく、生きづらさを抱えるマイノリティの人たちにとってのバリアもなくしていこうと番組テーマを広げている。ゲストは先入観なく、話を聞く役割を担っていたと思うが、笑いの要素がどこまで必要かは今後も検討していきたい。

○　７月２８日(日)のＢＳ１スペシャル「ラストトーキョー　“はぐれ者”たちの新宿・歌舞伎町」を見た。長い時間をかけて取材し、じっくりと見せるＮＨＫらしい番組だった。団塊世代の母親と団塊ジュニアの娘、２人がそれぞれ生きてきた時代を反映した心象風景の違いが伝わる内容だった。場所が人々の興味をひきやすい「新宿・歌舞伎町」だったという点もよかったと思う。

○　第２５回参議院議員選挙の結果、ＮＨＫから国民を守る党が比例区で議席を獲得した。選挙区では得票率２％を上回り、国から政党交付金を受け取れる政党要件も満たして公党の立場を確固たるものにした。選挙期間中にＮＨＫがこの政党をどのように取り上げるのか注目していたが、大変フェアに取り上げていたと思う。その上で、「日曜討論」などの討論番組にＮＨＫから国民を守る党やれいわ新選組という新しい政党は出られるのかが注目されている。「自主的な編集権で判断すべきである」というのはそのとおりだと思うが、その説明だけでは視聴者も納得いかないところもあると思う。どういった判断でどの政党に出演依頼をしているのかをきちんと説明するほうが、ＮＨＫがフェアに取り扱っていることを示すうえで望ましいのではないか。

（ＮＨＫ側）

「日曜討論」などの討論番組でどの政党に出演依頼するかについては、そのつど国政選挙の結果、国政への参加状況などを踏まえ、自主的な編集権に基づき判断している。いただいた意見は参考にしたい。

○　初めて国政選挙の報道を地方で見た。国政選挙の場合、地方と全国の動向をどう伝えるかのバランスは難しく工夫して伝えていると思うが、もう少し全国の動向を知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

開票速報は、東京のスタジオから放送する部分と各局から放送する部分があり、その割合は一定のルールの下、各局の判断で行われている。今回のような指摘もあれば、東京が長く地域が短いという指摘もある。今後の参考にしたい。

○　「１９６４年東京パラリンピック大会記録映画」を見る機会があった。アーカイブス映像として貸し出しはされているようだが、パラリンピックの歴史を広く知ってもらうためにも、この記録映画をテレビでも流してほしいと思った。また、大河

ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」の人見絹枝さんの話は、女性がスポーツに進出していく歴史を描いていて反響が大きかったのではないか。あまり知られていないであろうスポーツの歴史を多くの人々に知ってもらい、考えてもらうことにも力を入れてほしい。

○　災害情報を伝える番組などで二次元バーコードが画面上に表示されるが、スマートフォンのない人たちはどうしたらよいのか。番組の中でアナウンスもしていると思うが、二次元バーコードだけに頼らずさまざまな情報を音声、画像でも伝えるようにしてほしい。

（ＮＨＫ側）

大きな事件・事故の際に、できるだけ速く伝えるという意味合いで二次元バーコードを使っている。一方で、スマートフォンを持っていない方や苦手な方にも情報を届けたいと常に強く思っており、データ放送も活用して伝えている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫのホームページで関連のページを見つけにくいという意見もあり、簡単に該当するところを表示できる二次元バーコードを放送で紹介している。災害情報については、スマートフォン以外の携帯電話でも同じ情報を得られるようにしているが、もう少し丁寧に分かりやすく説明するようにしたい。

○　「ウィンブルドン２０１９」を見た。決勝戦は、経験豊かなアナウンサーが担当しており、状況に応じた的確な実況で試合を飽きることなく見ることができた。また、日本人が出ていない試合は、競技の奥深さやおもしろさなどをきちんと表現しないと興味がわかないと思うが、カード選択や実況もよかったと思う。

○　ＮＨＫでも番組名にタレント名が入る番組が増えているように思う。新聞の番組表を見たときに、民放の番組とあまり変わらなくなってきているのではないか。

（ＮＨＫ側）

タレント名を番組に入れると、表面上は民放の番組と同じように見えるかもしれないが、内容についてはＮＨＫならではのものを意識し制作している。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年６月ＮＨＫ中央放送番組審議会

６月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１７日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、パラ×ドキッ！「おしどり柔道夫婦　レジェンドとガチ対決！」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)特別理事）
木村たま代（主婦連合会消費者事務局長）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社取締役編集局長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
永井　良三（自治医科大学学長）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜パラ×ドキッ！「おしどり柔道夫婦　レジェンドとガチ対決！」
（ＢＳ１　５月１９日(日)放送）について＞

○　「パラアスリート＝障害者」と単純化せず、アスリートとしての能力を評価しつつ、障害にも触れていて、大変よい番組だった。ＭＣを担当するお笑いコンビ千鳥の大悟さんがパラアスリートの方とスタジオでうまく距離を縮めているのもよかった。障害について触れるのは慎重さも求められるが、この番組は適切なバラン

スだったと思う。ただ、以前にも申し上げたが、ＢＳ１で放送しているだけでは、パラリンピックに興味のない方にはなかなか届かないのではないか。ぜひ総合テレビでも放送していただき、もっと多くの人がパラリンピックに興味を持つきっかけを作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

今後、総合テレビでも放送するなど、より多くの人に見ていただけるよう引き続き検討していきたい。

○　番組では、廣瀬順子選手と夫の悠さんの日常生活が紹介されたが、２人の雰囲気のよさが番組全体をよいものにしていると思った。パラアスリートについても、アスリートたるゆえんを扱うことが大切だと思う。アスリートの日常生活は一般の人には想像し難いものだが、今回はそこにも触れられていて、さらに価値ある番組になった。

○　冒頭部分で番組の意図がわかりにくく、なぜ対決するのか理解できなかった。視聴番組でなければ、おそらく見なかったと思う。スポーツに興味がない人にもわかるように、導入部分でもう少し丁寧に対決の意図などを伝えるとよかったのではないか。また、スタジオパートがにぎやか過ぎたのも気になった。視覚障害者柔道についてはなかなか知る機会がなかったが、丁寧に説明されていたので、冒頭を除けば、大変よい番組だった。障害がある箇所以外の能力が拡張していく、という話はとても印象に残った。

（ＮＨＫ側）

パラアスリートをアスリートとして捉えるときに一番の核になるのは能力を補うために新たな能力が発現するところであると思う。それを能力の拡張と番組の中では表現している。オリンピックと何ら変わらず、人間の最も進化した部分の戦いであるところをうまく表現していきたい。また、番組の導入部分で多くの視聴者に興味を持ってもらえる工夫などをさらに続けていきたい。

○　スポーツに関心のない人にもパラスポーツに興味を持ってもらうための１つの手段として、バラエティーとの融合があると思う。その場合、真面目な部分とのバランスがとても大切になる。健常者が視覚障害者柔道をすると、視野がなくなることで腰が引けてしまうということが紹介されたが、視覚障害者柔道を見る際に注目

すべきポイントをもっと取り上げてほしかった。今回は柔道と視覚障害者柔道を比べるという形だったが、視覚障害者柔道独自の取り組みや競技特性を伝える割合を増やしてもよかったと思う。競技や取り上げる選手によって、うまくバランスを考えて取り上げるとよいのではないか。対戦相手である谷本歩実さんの必死さやコメントからは人柄のよさが出ており、大変すばらしい人選だったと思う。

○　順子選手のパラリンピックにかける思い、アスリートとしての卓越した技量と感性、夫の悠さんの献身的なサポート、夫婦で協力し視覚障害のハンディーを乗り越えている日常など、番組の意図した部分がバランスよく、うまく発信されていた。視覚障害者柔道の特性や基本ルールをもう少し深掘りし、競技やアスリートの魅力からもそういった情報を引き出すような工夫があれば、より奥深い番組になったと思う。スタジオパートはバラエティー色が強く、参加者も少し多すぎると思った。順子選手と対決した谷本さんがスタジオにいれば、視覚障害者柔道の魅力、奥深さがさらによく伝わったのではないか。

○　バラエティーとパラスポーツを組み合わせるのは新しい試みだと思うので、表現が難しい部分もあるだろうが、途中やや冗長に感じられるところがあり残念だった。今後も試行錯誤が必要ではないかと思う。ただ、障害者の持つ高い能力、パラスポーツの特徴はよく描かれており、番組全体としてはよかった。

（ＮＨＫ側）

競技の詳しいルール説明については、番組が展開する中で見ている人に何となく後追いで伝わるほうが見やすいのではないかと考え、番組を制作した。障害について、あるいはそれをどう乗り越えたかなどという部分の伝え方については、パラアスリートによってさまざまな意向があるので、それぞれコミュニケーションを取りながら進めている。

○　バラエティーでパラアスリートを紹介しており、大変興味深く見た。パラリンピックでは競技のクラスが細分化されているイメージがあったので、柔道については視覚障害者柔道しかないことにも触れてもらえればよかったのではないか。引退したとはいえ、元金メダリストの谷本さんとの対決は順子選手にとっては少し酷だった気がした。もっと違う形でパラスポーツのすごさを示す方法があったのではないか。

○　障害者の番組という感覚は全くなく番組を見た。視覚以外の感覚も大きく影響し

ている競技である柔道を取り上げたのもよかったと思う。谷本さんとの対決は見応えがあり、おもしろかった。ただ、ほかのパラスポーツで今回と同じように“ガチ対決”するのはやや難しいかもしれないと思った。

○　順子選手、谷本さんのことばからアスリートとしての真剣さ、正直さ、素直さとともに、謙虚さが強く伝わってきた。特に順子選手はいろいろな苦労があると思うとさらに心に響き、谷本さんと互角に戦えたことに感動した。また、悠さんとのやりとりからご夫婦に対して親しみが持てたので、順子選手がパラリンピックに出場したら心から応援できると思った。こうした番組などをきっかけにして、多くの人にパラスポーツに興味を持ってもらうことでパラリンピックが盛り上がるのではないか。

（ＮＨＫ側）

今回の対決については、順子選手からも組むだけで勉強になるので、ぜひやりたいというお話を頂いた。勝ち負けだけでなく、番組を通じて、パラアスリートと、第一線で活躍したアスリートが対決する機会を持ってもらうことも番組の１つの役割ではないかと思う。多くの人に応援してもらえるような番組づくりを引き続き考えていきたい。

（ＮＨＫ側）

谷本さんのようなトップアスリートがパラアスリートと戦って実感することは番組のもう１つの軸になると考え、対決方式とした。アスリートどうし尊敬し合いながらも、真剣勝負なので、対決してそこで初めて気付くこともある。そういうものが番組の力になっていると思っている。

○　これまで福祉的な意味合いで取り上げることが多かったパラアスリートをあくまでもアスリートとして取り上げているところがよかった。パラリンピック選手がオリンピック選手の記録を超えるような競技も出ている中で、東京パラリンピックを放送でどのように取り上げるのかしっかり考えるべきタイミングに来ていると思う。ＮＨＫがさまざまな形でパラリンピック関連や障害者スポーツの番組を放送しているのは大変よいことだ。ＮＨＫ全体として 2020 年の東京パラリンピックの放送についてどういう方針を持っているのかお伺いしたい。

（ＮＨＫ側）

来年８月に向けて、パラリンピックについては、ＢＳ１の「アニ×パラ」という番組で、パラスポーツの競技ルールや楽しみ方などをわかりやすく放送している。また、Ｅテレでは「ハートネットＴＶ」などでも随時取り上げている。秋に行われる競泳、陸上などの世界大会も視野に入れ、パラリンピックの放送計画をもう一度検討しているところだ。できるだけ多くの方に見てもらえるように考えていきたいと思っている。

○　バラエティーの部分と、真面目な部分のバランスがよく取れていたと思う。楽しさやおもしろさが表現された上で、誰もが知っているレジェンドの谷本さんと対決させる演出がすばらしかった。夫であり、コーチでもある悠さんを通して、順子選手の人柄がよく伝わってきた。東京パラリンピックでどの競技を見に行くか迷っていたが、視覚障害者柔道を見に行きたいと思った。今までこの競技のことをあまり知らなかった人も応援したくなるような番組だった。

○　大変楽しく見た。この番組は人選がすばらしかったと思う。スポーツのみならず、共に高め合って生きている廣瀬夫妻の姿にとても好感が持てた。この番組が成功したと感じたのは一番の見せ場である目隠し対決が終わった後に谷本さんが「目に見えることがすべてだと指導していたが、見えない中で技をしっかりと体にしみこませるのが大切だと感じた。パラリンピアンからたくさん学ぶことがある。」と言っていたところだ。スポーツだけでなく、社会においても健常者が障害者から学ぶところがたくさんあることを示唆しており、大変よかった。一方で、スタジオでのお笑い芸人のやりとりにはやや冗長な印象を持った。廣瀬夫妻の日常や谷本さんとの対決だけでも十分に楽しめる番組だったのでないかと思う。

○　谷本さんが「学ばなければいけない」と言われたときの表情がすばらしかった。谷本さんと廣瀬夫妻の人選がよかった。ただ、バラエティー色の強いスタジオなどの部分は間延びした印象だった。５０分の番組の中で、廣瀬夫妻や順子選手のアスリートとしての魅力をもっと表現できたのではないか。

（ＮＨＫ側）

「パラ×ドキッ！」を通し、多くの人にいろいろな競技のパラアスリートを知ってもらい、パラリンピックを応援してもらいたいと考えている。また、ほかの番組ともうまく連携

していければと思う。バラエティー部分については毎回議論
しているが、今後もよりパラアスリートの魅力が引き出せる
ように考えていきたいと思う。

○　昨今、社会において「ダイバーシティ＆インクルージョン」が注目されているが、今回は「インクルージョン」がうまく表現された番組だと思った。谷本さんが「目に見えることがすべてだと指導していたが、見えない中で技をしっかりと体にしみこませるのが大切だと感じた」とコメントをしていたが、アスリートとして学ぶことがあったとトップアスリートである谷本さんが明言したのは大変よかった。また、お互いに助け合い、気付き合う廣瀬夫妻の姿は見ている人をほのぼのとした気持ちにさせたと思う。

○　パラリンピックを盛り立てる意味で、視聴者が入りやすいバラエティー的な企画で呼びこむという意図が感じられた。そのために番組全体の雰囲気も楽しく、一定の成功を収めていると思う。特に廣瀬夫妻の生活の紹介がバランスよく入っていたことはバラエティー一本やりで終わるのかという危惧を払拭（ふっしょく）してくれたのでとてもよかった。谷本さんのコメントも的を射ており、見ていて気持ちがよかった。トップアスリートとパラアスリートの対決という構図にはさまざまな意見があると推察されるが、こうした企画により、パラ競技への関心を呼びこんだことは評価できると思う。

＜放送番組一般について＞

○　６月２日(日)のＮＨＫスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」を見た。家族の話として考えさせられた。みずから死を選んだ女性と、その家族の心の葛藤を長期間にわたり密着取材したことについては評価したい。一方、安楽死を行った団体については、もっと掘り下げるべきだったのでないか。一歩間違えると安楽死のビジネスを助長するような側面があったので、その点は慎重に取り上げるべきだったと思った。

○　ＮＨＫスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」を見た。難病を患い、いずれ人工呼吸器が必要になることがわかっている中で、「人生の終わりを意思が伝えられるうちに自分で決めたい」という彼女の決断と寄り添う家族に密着し、死の瞬間までを映し出していた。その映像は深く重く心に残った。こういった番組は見るのがつらい部分もあるが、生きることや命について考える上でもとても大事だと思う。同じ

難病で人工呼吸器が必要になっても家族とともに生きる選択をした患者も取り上げていたが、この家族についてあまり言及がなかった。また、スイスの安楽死団体や家族が自殺ほう助にあたるのではないかという点が気になった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」については、安楽死そのものを評価するのではなく、安楽死を選んだ人とその家族が抱える葛藤などを伝えることで、多くの人に自分の最期のあり方について考えてもらおうという趣旨で制作した。スイスの安楽死団体についての指摘は、制作担当者と共有したいと思う。

○　５月１９日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　子どもの“声なき声”第１回「いじめと探偵～行き場を失った“助けて”～」を見た。いじめ探偵の密着取材を通して、学校や教育委員会などのずさんな対応、深刻ないじめの実態、子どもたちの悲痛な心の叫びを伝えていた。調査報道としても意義のある番組だったと思う。また、５月３０日(木)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　子どもの“声なき声”第２回「“不登校”　４４万人の衝撃」(総合 後 10:00～11:18)も見た。日本だけでなく、個性を尊重するオランダの教育事例を紹介するなど、学校教育についてあるべき姿を問い直す時期に来ているという問題提起がとてもよかった。一方でスタジオと連動して、生放送で中学生たちの声を集める演出になっていたが、時間的な制約もあり、中途半端な取り上げ方になってしまったのは残念だった。内容を盛り込みすぎて、焦点がややぼやけてしまった印象を受けた。ただ、この２本のシリーズは今の日本の教育に関する、重要な問題提起をしており見応えのある番組だった。今後も何らかの形で継続して深掘りしていただきたい。

○　６月９日(日)のＮＨＫスペシャル「天安門事件　運命を決めた５０日」を見た。時間が経過したからこそ出てくる情報もあり、緊張感を持って見た。このような事件を３０年が経過したタイミングで新しい情報も加えて次の世代にも伝えるために放送するＮＨＫに敬意を表したい。番組を見て、民主主義社会に暮らしているいる１人として真面目に生きていかないといけない、真面目に物事を考え、行動しないといけないと改めて思った。

○　５月２２日(水)のクローズアップ現代＋「追跡！ネット広告の闇　水増しインフルエンサー」を見た。ブラジルまで取材して、フォロワーを売買している実態を明らかにするなど、ＮＨＫならではの番組だった。こういう問題は引き続き取り上げ

てほしい。

○　クローズアップ現代＋「追跡！ネット広告の闇」を見た。根気強く調査した重厚な報道番組だったが、実際ＳＮＳを駆使している若者には届いていないのではないかと思う。「Ｎスペ５ｍｉｎ.」は「ＮＨＫスペシャル」の内容を５分に短縮した番組だが、いろいろな時間帯に放送され、インターネットでも見られるので感心している。今回のような番組は本当に見てほしい層に届くように、「Ｎスペ５ｍｉｎ.」のようにインターネット上でも短縮版が見られるような工夫をしてほしい。

（ＮＨＫ側）

「Ｎスペ５ｍｉｎ.」は「ＮＨＫスペシャル」の内容を５分に短縮し、主に放送後にインターネットなども含めて展開している。「クローズアップ現代＋」についてもショート動画などさまざまな形でコンテンツを展開している。

○　５月２９日(水)のクローズアップ現代＋「カスタマーハラスメント！客の暴言で心が壊される」を見た。客からの悪質なクレームや迷惑行為が行き過ぎている事例が紹介されたが、一方で客からの正当なクレームであっても、企業にとっては厄介な顧客をクレーマーとして扱うこともあると思う。そういった側面にも触れれば番組にさらに深みが出たのではないか。

○　５月２５日(土)の有吉のお金発見　突撃！カネオくん「“忘れ物”にまつわるお金事情に迫る！」を見た。リラックスして見られる楽しい番組だと思う。お金にまつわる話題だが、子どもが見てもあまり嫌らしくなく、身近なテーマから理解できるところがよい。

○　土曜ドラマ「デジタル・タトゥー」を見た。インターネット社会を反映し、インターネットがはらむ問題を人間性と絡めておもしろいドラマで描くことは社会的に意義がある。こういう連続ドラマはＮＨＫでなければできないと思った。

○　土曜ドラマ「デジタル・タトゥー」を毎週楽しく見ていた。インターネット上では一度発信した情報を完全に消すことが出来ないことは、一番初めに学ばなければいけない情報リテラシーだと思う。ＮＨＫがドラマを通じてそのことを教えてくれている気がした。みんながうまくＳＮＳと付き合っていく方法を模索しているタイミングでこのドラマを放送したことは時代に合っていて、とてもよかった。今後も継続して、こういった時代を反映したドラマを制作してほしい。

○　土曜ドラマ「デジタル・タトゥー」を見た。インターネット上での振る舞い方、現実社会との相違点などがとてもわかりやすく描かれていた。現代社会の課題を分かりやすくドラマで描く取り組みは今後も続けていただきたい。

○　６月２日(日)のサイエンスＺＥＲＯ「外来種と固有種　小笠原諸島の変」では、小笠原の島々の間を行き来した鳥が、無人島にも植物の外来種を運んだと考えられていることが紹介され、そもそも固有種とは何なのか改めて考えさせられた。農業では家畜の改良や種の管理は当然のテーマだが、この番組を見て、改めて命や種については慎重に扱わなければならないと感じた。６月９日(日)のサイエンスＺＥＲＯ「ヒトとイヌ　進化の歴史が生んだ奇跡の関係」を見た。イヌもヒトも幼い形のまま成熟できる、幼形成熟をする生き物なので、お互い分かり合えるのかもしれないという説明があり、非常に納得できた。５月１２日(日)のダーウィンが来た！「最高の相棒！イヌと人」も見たが、いずれの番組も、気楽な気持ちで見ているにも関わらず、大変勉強になるのがよい。

○　５月２１日(火)に再放送された、ＢＳ１スペシャル「ボクの自学ノート～７年間の小さな大冒険～」（ＢＳ１　後 5:00～5:49)を見た。資料館や文化施設の人たち、時計店の社長など地域の大人が“ボク”の自主的な学びに真剣に向き合った結果、少しずつ彼の世界が外に広がっていくドキュメンタリーだった。学校の勉強が合わない、不登校、引きこもりなど、子どもを取り巻くさまざまな問題があるが、この番組はその１つの解決策を示したのでないか。また、彼の１つ１つの表情を丁寧に捉えた映像もとてもよかった。

○　６月２日(日)のドキュメンタリードラマスペシャル「リセット～あの日、人生を変えた～」(ＢＳ１　後 10:00～10:50、11:00～11:49)を見た。俳優の満島ひかりさんが世界の４人のパラアスリートに出会う 100 分の番組だった。４人それぞれの奇跡のテクニック、フィジカル、メンタルなどを紹介し、そのすごさを映像でよく表現していた。今までもパラアスリートのすごさを実感する番組を何度か見たことがあるが、この番組は満島さんがパラアスリートに素直に「おもしろい」と言う自然体なところがとてもよかった。スポーツに興味を持つ原点は「おもしろさ」なのだと改めて感じた。

○　ドキュメンタリードラマスペシャル「リセット～あの日、人生を変えた～」を見た。オリンピック・パラリンピックに関係なく、選手が勝つために真摯（しんし）に取り組んでいる部分がよく描かれていた。何らかの番組を入り口に、パラリン

ピックに興味を持ってもらえるよう、ＮＨＫには引き続き取り組んでもらいたい。

○　５月２８日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「世紀の番狂わせ～そして彼らはヒーローになった～」を見た。ラグビー日本代表が 2015 年 9 月に強豪・南アフリカに勝利した試合について、鍵を握る３人の選手、それぞれの視点を中心に象徴する試合の場面を振り返り、勝利するところまでを追いかけていた。孤高の選手がチームのリーダーへと人間的に成長したエピソード、土壇場でコーチの教えを超えて自立したチームへと成長したエピソード、ワールドカップ前年にレギュラーを外されながらも精神的支柱として勝利のためにチームを支え続けた初代キャプテンのエピソードなどが取り上げられており、大変感銘を受けた。番組を見てラグビーのファンになり、スポーツはすばらしいものであると改めて思うともに、自分も少し成長できたような感覚になった。秋にはラグビーワールドカップが開催されることもあり、この番組をたくさんの人に見てもらいたい。

○　「人間ってナンだ？超ＡＩ入門　シーズン３」の放送曜日と時間が変わり、再放送もなくなっていた。新番組や注目番組は事前に力を入れて広報されるが、継続番組の放送時間帯の変更や再放送がなくなったことなどについては、視聴者にうまく伝えられていないと思う。ふだんから視聴している人への配慮も必要ではないか。

○　老後の資産形成に関する金融庁の審議会が作成した報告書のニュースについて、ＮＨＫは与党と野党の動きばかりを伝えており、そもそも年金にはどんな問題があるのかといった、視聴者が知りたいことについてほとんど時間を割いていなかったように思う。報告書が問題にしたことは何だったのかをこの機会にきちんと取り上げていただきたかった。

（ＮＨＫ側）

報告書のニュースについては、与野党の発言、反応に加え、報告書が出された根拠、背景、年金が抱えている問題なども含めて報道していると考えている。そのような印象を持たれたことは、報道現場に伝え、今後報道をする際に参考にさせていただく。

○　日本人の氏名の英語表記について伺いたい。名字を先にするよう統一する動きもあるようだが、関心を持ってＮＨＫのニュースを見ていると、今は統一されていない気がする。東京オリンピック・パラリンピックの前には方針を決めておいたほうがよいのでないかという気がした。

（ＮＨＫ側）

国内番組では、番組によって名字が先のもの、名が先のもの、どちらも使っており、今のところ一定の方針はない。視聴者に分かりやすい、なじみ深い形ということで選択している。そのような指摘があることも踏まえ、いろいろな方の意見も聞いて具体的にどう進めるのか考えようとしているところだ。

○　ＮＨＫのニュースでは元号を原則として使っているように見受けられるが、西暦のほうが視聴者にとってわかりやすいのではないか。国際意識を養う上でもそのほうがふさわしいと思う。以前の審議会で同じ質問をしたが、元号が変わるタイミングなどを機に慎重に検討したいとの話だったと思う。その後方針に変更はあったのか。

（ＮＨＫ側）

元号と西暦の使用については、これまで元号が国民生活に浸透していることを踏まえ、ニュース、番組で、最もふさわしい表現を使うようにしてきた。これからも視聴者にとってわかりやすい表現であるよう努め、個別のケースに応じて判断し、使用していきたい。

○　国民生活に深く浸透しているということだが、例えば世論調査などで国民がどちらをよく使っているのかというデータを持っているのか。

○　複数の新聞の世論調査では、西暦のほうが親しみを持っており、使う人も多いというデータが報じられていると思う。ＮＨＫの世論調査では元号のほうがよく使うという結果だったのかもしれないが、それが視聴者の認識かどうかは大いに疑問だ。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫは政治意識の月例調査を行っており、毎月第２月曜日に放送して、結果をお伝えしている。４月の調査で「あなたは、ふだん、元号と西暦のどちらを多く使いますか」という質問をしたところ、「元号」を選んだ人が「西暦」を選んだ人の割合を上回った。こういった調査結果も判断材料の１つとしているが、指摘については報道現場とも共有し、議論を

続けていきたい。

○　ＮＨＫは公共放送なので、国民生活になじんでいるという観点は確かに大事だと思う。それと同じようにこれからさらにグローバルな社会を迎える中で、公共放送としてどちらを使うほうがいいのかという議論も大事だと思う。

○　４月５日(金)の「チコちゃんに叱られる！」で「オルバースのパラドックス」に関し「なんで夜は暗いの？」の回答ＶＴＲに出演した先生が「宇宙が膨張している」ということばに続いて「太陽・月・人間など宇宙のあらゆるものが膨張している」と言ったようだが、それはいささか乱暴な言い方ではないか。回答を依頼する専門家については慎重な人選が必要でないかと思った。

（ＮＨＫ側）

番組の中で何らかの補足説明が必要だったと思う。「チコちゃんに叱られる！」は多くの人に楽しんでもらっている番組だが、その理由は、おもしろく見せる演出の根幹には、ＮＨＫの確かな取材があるという安心感があるからではないかと思う。今後ともそのような視聴者の期待に応えるようにしていきたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年５月ＮＨＫ中央放送番組審議会

５月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１３日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０１８年度第４四半期・１～３月)について、放送番組の種別および種別ごとの放送時間（２０１８年１０月～２０１９年３月分)について説明があった。続いて、クローズアップ現代＋「徹底追跡！“アポ電強盗”本当の怖さ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

副委員長　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)特別理事）
栗原　　友（料理家）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)フェロー）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０１８年度第４四半期・１～３月）について＞

○　インターネットサービスの質的指標について「わくわくドキドキする」、「視聴するだけでなく、参加できる」、「発信・拡散のもととなる素材が得られる」、「独自の

技術を活用した新たなサービスが体験できる」などの評価があまり高くない。こうしたインターネットに求められる評価を高める取り組みを進めないと、若い人たちの支持を得られないのではないか。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫのインターネットサービスは現在、放送の補完の役割として提供している。ただ、世界の情勢や国内での利用のされ方をみていると、インターネット領域での可能性は、いろいろなことが考えられると思う。ＮＨＫとして、どこまでのことをどのように進めていくかは、今後もさまざまな意見を伺いながら考えていきたい。

（ＮＨＫ側）

インターネットを通して番組に参加できる試みは、いろいろと行っている。「わくわくドキドキする」の指標に関していうと、今は番組でそう感じてもらうための誘導としてインターネットを利用している。指摘のように、インターネットに求められる評価を高める取り組みについては引き続き追求していきたい。

＜クローズアップ現代＋「徹底追跡！“アポ電強盗”本当の怖さ」
（総合　４月２３日(火)放送）について＞

○　“アポ電”とは言われているが、新しい手口の強盗の話だと思った。自分も身構えなければならないという現実に暗い気持ちになった。番組は、手口をよく分析していて、情報源として加害者側の当事者の話を盛り込んでいたが、これは取材対象者探しも取材交渉も大変だったであろうと推察した。一方で、こうした取材にもＳＮＳを活用していることを考えると、犯罪の巧妙化と表裏一体で複雑な気持ちだ。

○　加害者側の取材まできちんとできている取材力の高さに感心した。３０分という短い時間で問題点も指摘しており、よい番組だと思った。ただ、この問題の背景には、５０兆円を超えるともいわれている膨大なタンス預金の存在があると思う。大きな流れで見れば、金融を緩和しすぎた結果、このような犯罪を生んでしまったという側面もあるのかもしれない。そういう点を入れてもらえれば、なおよかったのではないか。

○　テロップの文字を大きく画面に出していたのが、年配の方が見るのに理解しやすくてよかった。一方で、いくつか気になる点もあった。１つ目は、“アポ電強盗”で逮捕されたうちの１人が「格闘技大会にも出場していた男で、被害者に直接危害を加えていた」と説明する際に、背景に格闘技をしている映像が映っており、「格闘技＝怖い」というイメージに直接結びついてしまった。２つ目は、取材した社会部記者の「“アポ電強盗”は一度狙われたら逃れられないところに怖さがある」という発言について、逃れたいからこの番組を見ているので、そう言い切られてしまうとその後を見る気持ちがややそがれてしまった。３つ目は、アナウンサーの長い爪が、番組の内容を考えた時に、そぐわない気がして違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

“アポ電強盗”をどうすれば防げるのかについて、なかなか対処法がない中で、今回は、これまで以上に怖さをしっかり伝えることが番組の役目ではないかと思い制作した。

○　“アポ電”にだまされないということだけでなく、自分の命をどう守るかについて考えさせられる、とても怖い番組だった。背景として、ＳＮＳでメンバーを募っている実態を突き止めるなど、取材力の高さには敬意を表する。こうした犯罪への対策として、最近では、電話が鳴ると注意喚起する人形を貸し出す自治体もあるそうだが、最終的には、「モラル」や「助け合いの精神」など道徳教育にまで踏み込まないといけない問題だと思う。“アポ電強盗”の加害者側のインタビューは非常に衝撃的だった。

○　非常に手厚く取材されていた。最近、ＳＮＳでメンバーを募るようになったことで、元詐欺グループ幹部の男が「集まる人間の質が落ちている」と言っていたのは特に印象的だった。加害者側にも上下関係や階級があることに驚いた。一方で、警察の捜査状況や、効果は上がっているのか、などの言及があれば安心できたが、そういう観点がなく、恐怖感を印象付けるだけで終わってしまったのは残念だった。

○　元詐欺グループ幹部の男が「集まる人間の質が落ちている」と言っていたことが恐ろしかった。ただでさえ怖いのに、その中でもさらに「質が悪い」とはどういうことなのか、もう少しスタジオなどで掘り下げてほしかった。番組全体のナレーションを担当している声優は、人気アニメなどの印象があまりに強いので、テーマによっては違和感を覚えることもある。

○　ＮＨＫは「首都圏ネットワーク」などの番組で「ストップ詐欺被害！私はだまされ

ない」というコーナーを継続しており、社会問題を取り上げて啓発していることに敬意を表する。今回の番組では犯罪者が暴力的にエスカレートしていく過程がリアリティーをもって伝わり、「自分は大丈夫」と思わせないための徹底した工夫を感じた。また、詐欺に対する細かい対処法も示されていたと思う。ただ、個人情報の取り扱いについては、もう少し踏み込んで、政府や警察への提言があってもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

個人情報の問題については、引き続き掘り下げて取材をしていきたい。

○　タイトル通り非常に怖さを感じた。この種の犯罪がより凶暴化し、深刻な社会問題になっている現状をタイムリーに放送していてよかった。“アポ電強盗”が暴力的になっていることへの危機感や個人情報の取り扱いについて指摘し、問題提起したという点ではよかった。これまで放送してきた「ストップ詐欺被害！私はだまされない」で伝えてきたことを、この番組の中でも繰り返し伝えることは大事だと思った。一方で、詐欺だと気づいて警察に通報したにも関わらず、重大な危害を与えられたという実例が紹介されていたが、解決策が全くなかったことは残念だった。もっと多角的な防止策が伝えられればよかったと感じた。

○　相手の情報を事前に入手する手間をかけ、殺人まで犯すリスクを負いながら、数百万円を手にするという“アポ電強盗”の実態を見て、背景には就労の困難さや貧困の連鎖という問題があるのではないかと思った。厳罰化だけでは解決できない問題だと感じる。ＳＮＳを使って簡単に犯罪が拡大されていくという中で、若年者が犯罪に巻き込まれていくという危険も感じた。なぜ罪を犯してしまうのかという犯罪者の内面も深堀りしてほしい。

○　短時間で、被害者だけでなく加害者側の取材もするなど、さまざまな内容がバランスよく伝えられており、よい番組だと思った。“アポ電強盗”が、粗暴犯と知能犯の巧妙な組み合わせであり、粗暴犯は「人手不足から、ＳＮＳでメンバーを募る」という現代的な背景を反映し、知能犯は「インターネット社会」を映し出していることもよくわかった。番組の中でもっとも現代社会を表しているのが「個人情報」だと受け止めた。個人情報は今の社会を生きる限り防衛の手段がない。消費者である限り、あるいはキャッシュレス決済を利用する限り、自分の個人情報が知らないうちにいろいろなところに拡散している怖さがある。そこは別途掘り下げてほしい。最後に、今回の番組は比較的若手の記者の提案から生まれたようだが、現場を歩いて感じたイン

スピレーションから作られる番組はよいものになると思う。これからも若手の声を大事に番組を制作していただきたい。

○　時宜を得た意義のある番組だった。“アポ電強盗”の被害者だけでなく、加害者側の証言、実際の“アポ電”の音声、ドラマ仕立ての犯行の再現ＶＴＲなどから、巧妙な手口や犯行の凶悪性など実態に迫っていた。ただ、個人情報の取り扱いに関連して、名簿業者への対応をどうするのかについての個人情報保護委員会などへの追及はやや浅い印象を受けたので、もう少し掘り下げて伝えてほしかった。個々人がどう身を守るのか、というレベルを超えた部分について、もっと掘り下げるような番組を期待したい。

○　非常にわかりやすく“アポ電強盗”の背景が理解できる番組だった。気になったのは個人情報の話だが、個人情報についてはルールの問題だけではなく、各人が個人情報というものをどのように捉えていくかということも重要な話ではないかと思っている。そのあたりもぜひ番組として取り上げてほしい。もう一つ、江東区の“アポ電強盗”について取材していたが、防犯カメラなどを使った最新の防犯体制や、警察の捜査体制がどうなっているのかという情報は、犯罪の抑止にもなると思うので、もう少し知りたかった。こうしたさまざまな手口の犯罪は、ルールで守るにせよ、技術で守るにせよ、最終的には教育が大事なのではないかと思っている。「ストップ詐欺被害！私はだまされない」のコーナーのように、継続して注意喚起するような番組を期待したい。

○　今回の番組を見て恐ろしく感じた。ＮＨＫがこれまで放送してきた「ストップ詐欺被害！私はだまされない」のコーナーを今まで自分は関係ないという気持ちで見ていたが、今回の番組はひと事ではない怖さを改めて感じる内容で刺激を受けた。犯罪の手口が巧妙化、凶悪化するなかで、誰もが自分に関係あることだと思うためには、こうした番組などを通じてもっと広く伝えていく必要があると感じた。

○　“アポ電強盗”の実態を知ることができて、非常によい番組だった。特に個人情報については、今後技術が進化するなかで、自分が丸裸にされてしまうのではないかという恐怖も感じたので、今後の番組で取り上げてもらいたい。“アポ電強盗”や“振り込め詐欺”は年配の人にしか関係ない話だと思っている人も多いように思うが、若い人にもこの現状と、このような犯罪に関わらないということ、ひと事ではないということを何らかの形で知ってもらえるような機会をぜひＮＨＫでも検討してほしい。

＜放送番組一般について＞

○　「ＮＨＫスペシャル」をはじめ、平成という時代を総括するさまざまな番組を放送していたが、いずれも質の高い番組だった。そこから２つの「ＮＨＫスペシャル」について述べたい。４月２０日(土)のＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第７回「自衛隊　変貌の３０年～幹部たちの告白～」は、過去の経緯を丁寧に取材したよい番組だった。１点だけ気になったのは、自衛隊が変貌した一番大きな理由は中国の軍拡だと思うが、そこに自衛隊がどう対応してきたかという点にほとんど触れられておらず残念だった。もうひとつは、４月２８日(日)のＮＨＫスペシャル平成史スクープドキュメント　第８回「情報革命　ふたりの軌跡～インターネットは何を変えたか～」だ。亡くなった２人の日本人が初期の段階からインターネットの技術開発にどのように取り組んできたかという経緯の話は参考になった。ただ、気になったのは、インターネットの未来について言及している部分で、取材した女性が「私たち民衆の声を聞いてください」と発信した内容を取り上げていたが、あくまでも個人の意見の発信なので、報道機関としてもう少し慎重に取り上げるべきではないかと感じた。

○　ＮＨＫスペシャル「情報革命　ふたりの軌跡～インターネットは何を変えたか～」を見た。この３０年間で、インターネットがどう発展していったのか、ふたりの先駆者を通して描かれた、印象に残る番組だった。サブテーマとして通底していたのは、インターネットで個人の発信力が強まっていくなかで、既成メディアに対する信頼が薄れてきている危機感だった。大手新聞社の役員が、その流れを認めたうえで、「取材のプロセスをできる限り開示することで、ユーザー側に信頼性を感じてもらうように変わっていかなければダメだ」という趣旨の話をしていたのが印象深かった。どのメディアも間違いは絶対にないと言い切れるはずもなく、ＮＨＫもいろいろなニュースや番組を作っていく過程での悩みどころや苦しみどころを、視聴者と共有する部分があってもいいのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「自衛隊　変貌の３０年～幹部たちの告白～」では、大前提として冷戦崩壊後の東アジアの安全保障状況の変化について強くコメントしていた。ただ、具体的に取り上げたケースが北朝鮮と思われる不審船の事件だったので、そのような印象を持たれたのかもしれない。ＮＨＫスペシャル「情報革命　ふたりの軌跡～インターネットは何を変

えたか～」の最後の女性の取り上げ方については、コメント等で一定の距離感をとって制作した。いただいた指摘は制作担当者に伝え、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　４月３０日(火)のＮＨＫスペシャル「日本人と天皇」(総合 後 8:00～8:54)は平成最後の日にふさわしい番組だった。大嘗祭をきちんと再現し、現行憲法下での皇室における宗教的行事と国事行為との整理の問題や、皇位継承の問題などについてしっかり問題提起がなされ、かなり踏み込んだ内容だった。改めて天皇制や皇位継承について視聴者とともに考える番組を放送したことは、公共放送として大変意義があった。

○　改元という大きな節目をＮＨＫがどのように報道するのか、興味をもって見た。天皇が退位された日は、ＮＨＫスペシャル「日本人と天皇」で、一番大きな問題である、今後の皇位継承問題を正面から取り上げており、公共放送としての役割を果たしていたと感じた。一方で、皇位継承の問題の難しさは突き詰めていえば、少子化の中での家族の問題に帰着するようにも感じている。新しい天皇が即位された日の、「ニュースウオッチ９」では、新天皇の即位のニュースを取り上げたあとに、家族の多様な在り方を特集していた。日本人と天皇の問題提起と即応して、新しい時代における家族の在り方を考えていくというメッセージが感じられた。この２日間の構成は熟慮を重ねた改元にふさわしい放送だった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「日本人と天皇」は、平成最後の日がどんな空気、雰囲気になるのか読み切れないところもあったが「ＮＨＫスペシャル」の中で次の時代に伝えるべきことを取り上げたほうがよいと考え、４月３０日に放送した。

○　４月３０日(火)のＮＨＫスペシャル「平成　最後の晩餐（さん）～日本人と“食”の３０年～」(総合 後 10:00～11:20)を見た。改元をきっかけに“食”の変化を取り上げたことの意義は大きい。３０年に及ぶ豊富な映像と取材情報を通して、食のグローバル化、安くなった農産物の価格と生産者の苦悩、食の安全の問題など“食”に関するあらゆる問題をバランスよく取り上げていた。今後も、こうした“食”に関わる問題に向き合っていただくとともに、その向こう側には「農業」があり、「生産者」がいるということを視聴者が身近に感じられるような番組を期待したい。

○　５月５日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ人体Ⅱ遺伝子　第１集「あなたの中

の宝物“トレジャーＤＮＡ”」を見た。これまでの解析で、「何の働きもしないゴミ」と言われていた９８％のＤＮＡの中に、「病気から体を守る特殊なＤＮＡ」などがあることがわかってきたという内容で興味深かった。番組を見て、私たちにはまださまざまな可能性が残っているのではないかと希望が持てた。ふだん目に見えるものの価値に重きを置きがちだが、心など目に見えないものにスイッチが入ることが大切なのではないかと思った。伸び悩み、結果が出ないときに意識すべき大事なアプローチではないかと感じた。

○　ＮＨＫスペシャル「あなたの中の宝物“トレジャーＤＮＡ”」は大変おもしろかった。番組の見せ方がかなり進歩しており、ＣＧの精巧さだけでなく、実際に病気にならない遺伝子を持っている人や、研究者の声なども丁寧に取材されていてリアリティーをもって見ることができた。出演者のバランスもよく、落ち着いた雰囲気のなか、さまざまな意見を聞くことができたのもよかった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「シリーズ人体Ⅱ遺伝子」は去年８本シリーズで放送した「人体　神秘の巨大ネットワーク」で培ったものをベースに制作したものだ。最新の知見を高精細のＣＧで見せながら、タモリさんと京都大学ｉＰＳ細胞研究所所長の山中伸弥さんのスタジオでのやりとりで深めるスタイルがかなり成熟してきたと思っている。

○　４月２９日(月)の病院ラジオ「子ども病院編」(総合前 8:15～8:59)を見た。重い病気の子どもとその家族が、その病気を患っていること自体も自分であると、大変な現実を受け入れている様子や、日常を楽しく映し出していて、愛、家族、生きている意味が濃縮された番組だった。

○　５月１２日(日)のダーウィンが来た！「最高の相棒！イヌと人」を見た。３０分とは思えない中身の濃い番組だった。イヌが独自の能力を発揮して人との絆を深め、人とともに進化してきたことを世界各国の実例を通じて伝えていたが、科学的な側面だけでなく、人間との心の触れ合いという側面からも解説があり、単に愛らしいペットというだけでない、人の近くに存在し続けている理由がわかる気がした。

○　４月２０日(土)のごちそんぐＤＪ「食いモンドウ～なんじゃこりゃ～」を見た。ヒップホップアーティストの女性が、独自の歌と映像にのせておいしい食べ物を紹介する番組だった。じゃこが苦手な子どもが食べられるように、あぶったり、炒ったり、

すり身にしてさつま揚げに加工したりと、じゃこのいろいろな食べ方を見せているところまでは食育につながると思い見ていた。しかし、その子がどれも苦手だと言った結果、最後に紹介された料理がカレーだったのには驚いた。これではカレーという強烈なスパイスでただ味を隠すだけで、じゃこと同じ栄養のもので代用できてしまう。ポップで楽しい番組ではあったが、食育という観点ではやや残念だった。

○　４月２７日(土)のＥＴＶ特集「九段　羽生善治～“ＡＩ世代”との激闘の軌跡～」を見た。将棋、棋士に対して、愛がある番組だと感じた。ＡＩを徹底的に活用し実力をつけた若手たちに、これから負かされるかもしれない羽生九段を描いているのだが、最終的に人間が粛々と行っていく営みのすごさを感じさせる番組であった。

○　４月２７日(土)の「勝利の条件　スポーツイノベーション」を見た。スポーツがとうとう技術の争いの時代に突入したとひしひしと感じた。印象的だったのは、「知る」を「できる」につなげることが大事だという話だ。これまでは情報として映像を入手できる国が強い選手を育てることができたが、すでにその情報格差はなくなっており、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックでは、ＡＩ等を活用して多角的な視点で精密に分析して技の精度を高め、さらに戦略を立てていくという闘いになり、国の技術力を争う場になるのではと感じた。また、ＡＲ(現実の風景に情報を重ね合わせて表示する技術）でプロとアマの技を体感するのもおもしろかった。データを競技観戦や映像視聴とも組み合わせることで、新たなスポーツの楽しみ方を見いだせると思うし、スポーツ放送の可能性も感じられた。今回はプロフェッショナルを育成するためのデータの活用だったが、次世代育成や教育の分野にも使えるものだと思った。

○　４月２７日(土)のＢＳ１スペシャル「個人情報が世界を変える」を見た。フェイスブックをめぐって起きた、ケンブリッジ・アナリティカ事件を取り上げ、個人情報に関する影の部分を大きなテーマとして紹介していた。しかし、この事件の説明の後に、出演者が性格を分析するアプリに自らの個人情報を入れる演出があり、大変疑問に思った。アプリで人の情報を盗む人がいる時代だからこそ、注意喚起のために慎重な番組制作が求められていると思う。

○　５月１日(水)のＢＳ１スペシャル「ボクの自学ノート～７年間の小さな大冒険～」を見た。北九州市の少年が小学３年生から中学３年生までの７年間に、新聞記事を中心に自分でテーマを見つけて学び、成長していく姿を追った番組だった。受験などの効率的な学びとは異なる学びがあることを教えられた。不安を感じながらも自学を受け入れた両親など、周囲の大人たちがきちんと向き合って真摯（しんし）に交流を深めており、北九州市の文化的な水準の高さを改めて感じた。こういうテーマを

うまくすくい取って放送したことに敬意を表する。

○　４月２７日(土)の中井精也のてつたび！「希望の春　三陸鉄道リアス線」を見た。この番組は、農村とそこに住む人々の生活を一面的ではなく、多面的に見せてくれる娯楽番組として貴重だと思っている。今回は三陸鉄道ということで、何とか地域を復興させたいという地元の人たちの思いがよく伝わってきた。また、過疎地の地域振興に貢献するという点で見ても、ビジネスモデルとして仕組みが示されていて勉強になった。

○　５月１日(水)の平成万葉集　第三回「この国に生きる」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:29)を見た。ゆとり教育、高齢化社会や介護、東日本大震災と原発事故など、平成という時代を反映する出来事が詠まれていたが、どの歌人からも、次の時代をよりよいものにしたいという気持ちが感じられた。また、３１文字を使った日本独特の短歌という表現方法は、えん曲でストレートではないだけに、心に刺さった。時代の節目に思いを新たにすることができる個性的な番組でよかった。改元にあたり、この番組以外にもさまざまな番組で天皇制の歴史、皇位継承の問題、政教分離の課題など、いろいろなことを取り上げており、公共放送としての役割をしっかり果たしていると思った。

○　「ＮＨＫ１．５ｃｈ」をいつも見ている。笑ったり、感動したりできる楽しいコンテンツがたくさんあるが、ジャンルの中にスポーツがなく、意外だった。パラスポーツも含めてぜひ取り上げてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫ１．５ｃｈ」では、「ハートネットＴＶ」など番組から派生した動画を展開している。スポーツに関する動画は、「ＮＨＫ sports online」というスポーツのポータルサイトに掲載している。今後、よりユーザーの要望に沿った対応をしていけるよう、意見を参考にさせていただく。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年４月ＮＨＫ中央放送番組審議会

４月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１５日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、落語ディーパー！～東出・一之輔の噺（はなし）のはなし～「火焔太鼓（かえんだいこ)」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
副委員長　大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
委　　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)特別理事）
木村たま代（主婦連合会消費者相談室室長）
栗原　　友（料理家）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（全日本金属産業労働組合協議会顧問）
花岡　伸和（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟副理事長）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
福井　　烈（公益財団法人日本テニス協会専務理事）

（主な発言）

＜落語ディーパー！～東出・一之輔の噺（はなし）のはなし～
「火焔太鼓（かえんだいこ)」（Ｅテレ　３月２６日(火)放送）について＞

○　落語に関して、詳しい知識がなく、江戸のことばで聞いても恐らく理解できないだろうと思って番組を見たが、意外に現代の言い回しを取り入れながら受け継がれていて、楽しめた。番組の後半で、スタジオの背景セットになっている「今川焼」の額が、

実は５代目古今亭志ん生の「火焔太鼓」が由来になっていることが種明かしされて、声を出して笑った。落語が身近に感じられ大変興味を持った。

○　落語の魅力を伝えようとしていることがよくわかった。おもしろいことや楽しいことが多い方が人生は豊かになると思う。古典落語のストーリー自体は多くの視聴者が知っているので、知っている噺をおもしろく聞かせようというのは意欲的なことだと思う。音のおもしろさ、テンポ、ことばのおもしろさ、お客さんとのライブでのやりとりから、落語のおもしろさや深みが出てくるのだということも今回初めてよくわかった。以前放送されていた「超入門！落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」は、落語を全然知らない人でも、おもしろく見られる番組だったと思う。一方で今回の番組は、落語に詳しい人が細部のおもしろさに感動するような番組だと感じた。例えば、野球のファインプレー集のように、誰が見てもすごさがわかるような内容にすると、より幅広い視聴者が楽しめるのではないか。

（ＮＨＫ側）

「超入門！落語ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」は、より多くの人たちが楽しめることを目指した、総合テレビのいわばエンターテインメント番組。一方、「落語ディーパー！～東出・一之輔の噺（はなし）のはなし～」は落語ファンにも満足してもらえるような番組を目指して制作している。

○　「落語ディーパー！」というタイトルを見て、落語についての理解をより深める番組かと思い、関心は低かったが、視聴してみると大変おもしろかった。同じ噺家、同じ演目でも毎回全く違うことを可視化して見せてくれたことで、落語が好きな人がどのように見ているのかを、詳しくない人でも追体験することができたと思う。番組を見た後にホームページに掲載された「火焔太鼓」の動画を全編見たいという気持ちにさせられ、テレビとインターネットの連携もとてもうまく出来ていたと思った。一方で、番組のタイトルを見ただけで、多くの人を引きつけるような工夫もほしかった。落語に詳しくない人がインターネットで動画を見つけて、テレビを見るという逆のパターンを作ることができれば、潜在的な視聴者がもっといるのでないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

タイトルが落語に詳しくない人を逃がしているとするなら残念だ。落語を少し聞きかじる、落語が近年ブームになっているという情報を知っている人がもう一歩入るという意味で「ディーパー」と付けた。これからもより多くの人に見てい

ただけるように努めたい。

○　幅広い人に落語に興味を持ってもらうことを目指しているという作り手の意図があるのならば、落語ファンだけがわかる内容ではなく、もう少し落語を知らない視聴者の興味を引くような紹介の仕方もあるのではないかと思った。

○　今回の番組は、知識を教えるのではなく、味わうというのはどういうことかを伝えており、よく出来ていると思った。番組では落語好きだけではなく落語に詳しくない人も自分の力で落語を味わうことができるように、さまざまなポイントを抽出して３０分の間に盛り込んでいた。スタジオの出演者もそれぞれの視点でポイントを示しており、作品のさまざまな味わい方を教えてもらえた。また、画面上に、出演者の東出昌大さんの落語を聞いている表情が小さく映し出されていたので、見ている人が一緒になって想像力を喚起されるのもよかった。惜しまれるのは、演目を全部聞くには、番組ホームページで動画を見る必要があり、ハードルが高かったことだ。もう少し、演目を見たと思えるところまで番組内で扱ってもらえるとよかった。

（ＮＨＫ側）

指摘の通り、落語の本編をどこまで見せるかは課題だと考えている。落語は１５分程度のものから、長いと１時間以上のものもある。スタジオでのトークを取り上げ、落語の本編まで番組に取り込むとなるとどれだけ時間があっても足りないので、番組で紹介しきれなかった落語の本編をホームページに動画で公開した試行錯誤はこれからも続けていきたい。

○　どのような形で笑いを作ろうとしているのか、プロの世界の芸がよくわかった。昔、ラジオで落語を聞いて想像して楽しんだ。先日は寄席に行ったが、噺家とお客さんとのやりとりが伝わってきた。ただ、テレビの時代になったときに、落語がややおもしろくなくなった気がした。映像が邪魔するのか、双方向ではないからなのか、テレビと落語の関係については今後も課題だと感じた。

○　ホームページに掲載された落語の動画を全編見てから番組を見た。今回テーマとなる落語がどういう噺なのか、わかった上で番組を見たので、より深く理解でき、おもしろかった。男女の声色は単なる声の高低だけではないなど、新しい発見もあった。また、落語にはかなりアドリブが入ることにも驚いた。大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」の話もあり、おもしろかった。ただ、ホームページで落語の動画を公開しているが、期間限定ではなく、もう少し長く公開してもよ

かったのではないか。また、パソコンやスマートフォンを持たない高齢者などは落語の動画を見られない。深夜の時間帯でもよいのでテレビで放送してもらえれば、録画して見てもらえる可能性もあるのではないか。

○　志ん生は、相当な貧しさの中、破天荒に生きた、落語が人生そのもののような人だと思う。今回の番組は「火焔太鼓」という演目よりも、志ん生の人生に焦点を当てた作りになっていた。落語の楽しさ、おもしろさ、古典落語の話芸としての奥深さ、天才的な噺家である志ん生の魅力をテンポよく引き出していた。また「火焔太鼓」はハッピーエンドの噺なので、すべてを取り上げるかは別にしても一つの番組の中で完結させたほうが落語のおもしろさがよく伝わる形になったのではないかと感じた。また、「火焔太鼓」は夫婦の関係がおもしろいので、志ん生と妻のりんさんとの関係をもっと引き出してもよかった。

○　番組タイトルが「ディーパー」となっているので、深掘りされるのかと思った。また、スタジオでの展開も業界の話が多いと感じた。それでも、落語を知らない人間でも非常に楽しめる内容になっていたと思う。落語は日本文化の一つだが「酒を飲むのに、つまみは海苔が粋」という話が出てくるのは生活に根ざしているからこそだと感じた。生活に根ざして初めて文化になるのだということを改めて感じた。番組を見て寄席に行きたくなった。

○　以前放送された、ドラマ１０「昭和元禄落語心中」、連続テレビ小説「ちりとてちん」など、現在の落語ブームの下地を作ってきたというＮＨＫのこれまでの取り組みには敬意を表したい。この番組のすごいところは落語本編はもとより、スタジオの話がおもしろいことだ。番組で話を聞いて満足することが出来て、ホームページの動画でテーマとなった落語本編を見なくても、「なるほど、こういう番組も作れるのか」と感動を覚えた。番組内に出演する真打や二つ目にしても、それぞれ個性があり、バラエティーに富んでいる。ただ、今回の「火焔太鼓」に限って言えば、ホームページには音源だけでも志ん生の落語を載せたほうがよかったのでないか。

（ＮＨＫ側）

落語のオチを見せるかどうかも課題だと考えている。何回かは番組の中で紹介したが「せっかくホームページの動画で見たかったのに残念だ」という意見を視聴者から頂いたこともある。例えば「鼠穴（ねずみあな）」を取り上げた回では、つらい話だがすべてが夢でよかったというオチを紹介した。

○　パソコンやスマートフォンでのコミュニケーションが多い中で、落語は、同じ内容でも話し手によってニュアンスが変わる見本のようなもので、話すことの大切さや、魅力を若い人に伝えるツールとして有効なのではないかと前々から思っていた。ブームと言われている背景には話すことに飢えている若者がたくさんいるのではないか、そういう人たちが落語に興味を持っているのでないかと思う。今後もＮＨＫならではの取り上げ方をしてもらい、落語が持つ潜在能力で、「話す」ことと「聞くこと」の大切さが落語ファンだけでなく、幅広く伝わってほしいと思う。

○　落語というよりも志ん生に注目し、番組を見た。天才肌たるゆえん、おもしろくない話をこれだけおもしろく出来ている、志ん生の“江戸の粋”に注目した。高座を紹介している部分は、「冒頭」、「クライマックス」、「オチ」と分けて紹介してもらうとすっきりすると思った。番組は、肝心の落語本編が始まったところで終わってしまい、全編はホームページで見るように促されたのは残念だった。

○　ＮＨＫの落語関連のさまざまな番組の影響で、落語に興味を持ち始めており、今回の番組も非常に楽しく見た。特に印象に残ったことが２点ある。１つ目は、番組構成が非常に粋だったこと。東出さんが「火焔太鼓」は「落語の中でも一、二を争うハッピーエンドが気持ちのよい噺だ」と言っていたのでうまく引き込まれ、次に「火焔太鼓」を取り上げるのかと思ったら、若手の噺家の話が始まり、最後にいよいよと思ったら、「本編はホームページで見て下さい」と最後までうまく興味を引く番組構成になっていた。２つ目は、話し手がどうやって人を引きつけるのかをいろいろな意味で学べたこと。話し手の個性が出てくることにより、人は引きつけられるのだと思った。聴衆も時代とともに変わっていく中、噺家の技には、奥深いものがあると感銘を受けた。

○　おもしろさをどう伝えるか、落語や漫才は参考になることが多い。番組では一見散漫に思えるトーク、業界話も、よく聞くと理解できる部分がありおもしろかった。また、ホームページとの連携がこれだけ成功している番組はないのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

落語の本編をどこまで見せるのか、ホームページとの連携をどうするのかは毎回議論になる。積み残したままではいけないと改めて思った。オチを見せないで満足してもらえるのか、番組の中だけでも満足してもらえるような演出を考えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月２３日(土)のＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」(総合 後 9:00～10:30)を見た。特殊詐欺の加害者の視点で、そこに加わった未成年がどういう運命をたどるのかを描いており、社会へ警鐘を鳴らす意味でも意義があったと思う。ただ、主犯格が「階級社会」を訴えて若者を集めるという場面にはやや違和感を持った。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「詐欺の子」は、実際に少年院に入っている元受け子たちにインタビューして制作するなど、実際の取材で得られたさまざまな事件、具体的な事例を組み合わせてドラマにした、限りなくノンフィクションに近いフィクションだ。

○　ＮＨＫスペシャル「詐欺の子」はよくできた番組だった。特殊詐欺について警鐘を鳴らすような報道や番組は多くあるが、この番組は実際に逮捕された未成年者の証言など、複数の実話に基づいて、ドキュメンタリーとドラマをうまく織り交ぜて深掘りし、リアルに描けていた。被害にあった高齢者が家族や近所から責められて心理的に追い込まれてしまうという状況も事実だろうと想像できた。加害者や被害者の心情の変化が伝わり、さまざまなことを考えさせられた。

○　ＮＨＫスペシャル「詐欺の子」は、現実を丁寧に描いており、実態がよくわかった。若者をどうやって詐欺グループの仲間に引き込むかや、そうした若者の親の気持ちがよくわかった。それと同時にこのドラマはもう一つのテーマとして、「ことばが危機にひんしている」ことを提示していた。近年、政治など大人の世界で、ことばが言い逃れに使われることが多くなっているのではないかと感じる。それが子どもの世界にも影響しているのではないだろうか。特に報道番組では「ことばは真実を語る」という大原則に立って報道することが重要だと思う。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「詐欺の子」については、罪を犯した子どもたちを追いかけた上で、彼らに同情しすぎてもいけないので、どういうエンディングにするのかいろいろと議論した。なぜ特殊詐欺がなくならないのか、どうしたら社会全体で詐欺をなくせるのか、そういう思いが最後に伝わるような形で弁護士の声なども入れるシナリオにした。そういう深いとこ

ろもくみ取っていただけてありがたいと思った。

○　３月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「“隠れ脂肪肝”が危ない」(総合 後 9:00～9:59)を見た。脂肪肝は目に見えないし、人間ドックを受けても取り上げられることもないので、大変興味深かった。“隠れ脂肪肝”のリスクチェックで、さまざまな年代の人がアンケートに答えながら、リスクの高さを表現するところの演出にも工夫が感じられた。番組を見て感じたのは、実際の医療現場と番組での取り上げ方のギャップだ。人間ドックでも扱ってほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

このシリーズでは医学界の最新の潮流や新しい知見をわかりやすく紹介している。その中でも最近注目されている“隠れ脂肪肝”について今回取り上げた。

○　４月１３日(土)のＮＨＫスペシャル　ＡＩに聞いてみた どうすんのよ！？ニッポン 第４回「超未婚社会」(総合 後 9:00～9:55)を見た。ＡＩは何が出来て、何が出来ないのか、何を期待してよいのか、分かりやすく、おもしろかった。一方で１月１０日(木)からＥテレで放送していた「人間ってナンだ？超ＡＩ入門　シーズン２」は専門的で難しかった。ＮＨＫは多くの人が楽しめる番組も、深く挑戦的な番組も制作しており大変よいと思っている。

○　３月２８日(木)の「復活の日～もしも死んだ人と会えるなら～」(総合 後 10:00～10:48)を見た。すでに亡くなった母親をＣＧを駆使して再現し、出演者のお笑い芸人と再会するという番組だった。亡くなった人を呼ぶというイタコの口寄せを２１世紀風にアレンジした感じがした。ただ、お笑い芸人が母親の味噌のおにぎりを食べて、感極まって泣く場面があったのだが、もともとリアクションを売りにするお笑い芸人なので、演技なのかもしれないと思ってしまった。こういう番組は人選が難しいと感じたが、非常に挑戦的な番組で、さすがＮＨＫだと思った。

（ＮＨＫ側）

「復活の日」では、亡くなった出演者の母親はＣＧだが、残っていた映像、写真、親族の方々への徹底した取材に基づいて再現した。確かに出演したお笑い芸人はリアクション芸の第一人者だが、あそこで起きたことは本当だと思っている。開発番組なので、仕掛けを見せたほうがよかったのか、見せないほうがよかったのかは今後検討させていただきたい。

○　４月３日(水)のクローズアップ現代＋「食費が激減！？“食品ロス”だけで暮らしてみた」を見た。このタイミングで食品ロスの問題を取り上げることは大切なことだ。専門家が、大手の企業などが取り組めない構造的な問題やルール、日本人の価値観などの論点を整理していた。ディレクターが食品ロスだけで生活し、日々の生活の我慢や体重減少などを表現していたが、この演出は、食品ロスへの対応が一面的で、誤解されてしまうように感じた。先進国に問われる社会的責任をもっと意識した上で、もう少し視聴者に危機感が伝わるような番組にしたほうがよかったのでないか。

○　クローズアップ現代＋「食費が激減！？“食品ロス”だけで暮らしてみた」を見た。取り上げ方が「極貧生活を体験してみよう」というような軽い印象を受け、あまりテーマを深刻に受け止められなかった。作り方はもう少し工夫があってもよかった。

（ＮＨＫ側）

今回は担当のディレクターが余った食品だけでどこまで食べていけるかに挑戦するという演出だった。こういう演出は評価が分かれるところだが、若い世代にはよく受け入れられる場合もある。若い世代にも伝わる手法も取り入れつつ、本質的な問題提起にもきちんとつながる、その両方の可能性を追っていきたいと考えている。そうした中の試行錯誤の一つとご理解を頂ければと思う。

○　４月１０日(水)のクローズアップ現代＋「密着！コンビニ店主の２４時　便利さの裏で何が？」を見た。コンビニは２４時間営業の問題などもあり、昨今話題になっている。出演者の１人が「これはＮＨＫでなければできない」と言っていたが、まさにその通りだと感じた。コンビニの集中出店の問題に切り込み、オーナーの過酷な労働などの実態をわかりやすく伝えていた。ただ一方で、経営する本部側はどう考えているのか、うまくいっている店はどう考えているのかという側面は表に出ず、コンビニ業界の全体像はこれでわかるのかという問題もある。時間に制約のある番組の中でバランスをどう取るのか、問題を多角的に伝える工夫が必要だと感じた。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代＋」は４月から１本３０分、週３本になった。本数は絞られるが、ニュースでは伝えきれない深い情報を日々伝えている。４月１０日の回の番組の中では全

体像を示す数字も随所に紹介し、会社側の言い分も入れた。翌１１日(木)の「ニュースウオッチ９」で本部側の新社長のインタビューを放送するなど、事態が動いている中で最大限のバランスを取り、放送したつもりだ。

○　３月２５日(月)の４Ｋ国際共同制作　完全版ブループラネット　第３集「生命ひしめくサンゴ礁」、２６日(火)の第４集「大海原　青い砂漠」、第５集「太陽が育む“緑の海”」(総合 後 8:00～8:43)を見た。第４集「大海原　青い砂漠」では、マイクロプラスチックについて取り上げていた。今、どう対応したらよいのかという問題意識を皆が持っていると思う。どんなデータよりも青い海とクジラの映像は緊張感があり、共存しなければいけないというメッセージが伝わった。

○　「４Ｋ国際共同制作　完全版ブループラネット」を見た。映像がきれいで、子どもや家族全員で話をしながら見たいと思える番組だった。

○　４月２日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「疾走、あんこ道～菓子職人・小幡寿康～」を見た。極上のあんこを炊き上げることの厳しさや奥深さ、プロフェッショナルとしての技のすごさもそうだが、それ以上に人間性や潔さ、ゆるぎない信念や職人としての誇りに感動した。ドラマチックな番組になっていたと思う。

○　４月５日(金)の「ニュースウオッチ９」で「５Ｇ」について取り上げていた。こういうテーマをニュースで取り上げるときは、長所だけを取り上げる報道が多いが、問題点をきちんと取り上げて指摘していたことに好感が持てた。

○　４月５日(金)の「チコちゃんに叱られる！」を見た。その中で「なんでお寿司は２つ一緒に出てくるの？」という疑問があり、大きすぎるので半分にしたという話はとてもわかりやすく、納得した。一方、その前の「なんで夜は暗いの？」という疑問の答えが「宇宙に果てがあるから」というのは、よく理解できず残念だった。

○　４月１２日(金)の「チコちゃんに叱られる！」を見た。その中で「日本で２番目に大きい湖は？」という疑問があり、答えは「霞ヶ浦」だった。知名度が低いのは、「名前に湖と付いていないから」までは納得したが、どうして湖と付いていないかについて追究がなく、不満が残った。

○　４月７日(日)の目撃！にっぽん「おせっかい不動産」は印象に残った。他人を支えているすばらしい人は日本中にたくさんいるが、その人たちを支えている人もまたい

る、ということがわかり感動した。自分も何かをしなくてはいけない、という気持ちにさせてもらえる番組だった。

○　４月８日(月)に再放送された、未来スイッチ　２０２０その先へ「エスカレーター　止まって乗りたい」(総合 後 8:44～8:45)を見た。2020 年に向け、身近な課題に目を向け、解決方法を探ろうという番組で、行動のスイッチ、ものの見方、考え方、視点を変えるスイッチなど、メッセージ性に引かれ、楽しみにしていた。今回は、いろいろな立場の人がいて、いろいろな考え方があることが見えたという意味ではよかったが、解決方法としてはもう少し議論が必要だったのではないかと感じた。番組の趣旨はすごくよいと思う。2020 年を契機に課題解決先進国になるきっかけとなる番組になることを願っている。

○　４月８日(月)の逆転人生「母は強し！連続雪崩から奇跡の生還」を見た。母親がどのように危機を脱したかという試行錯誤と、その後の明るく前向きな生き方がすっきり伝わってきた。また、非常時をどのように乗り切るかという情報も得られて、よい“逆転人生”になっていた。以前、審議会で視聴番組となった際のさまざまな指摘が生かされ、番組の価値が大いに高まっていた。

○　４月１３日(土)のシリーズ・江戸川乱歩短編集　　１９２５年の明智小五郎「心理試験」(総合 後 11:30～11:59)を見た。今人気のある俳優をキャスティングするなど、新たなスタイルで乱歩の小説の内容を知ることができ、楽しく見ることができた。この番組を見たら小説を読んだことがあると言ってもよいのでないかと思わせるほど、演出もすごくよかった。セリフだけでなく、小説の地の文章も表示され、あっという間の３０分だった。続きがあれば見たい。

○　４月１日(月)のハートネットＴＶ「パラマニア（１）車いすラグビー」、４月７日(日)のパラ×ドキッ！「車いすラグビーの勇者　迫力満点のガチ対決」を見た。どちらの番組もルールも含め、パラスポーツを深掘りしており、選手のパーソナリティーに迫る部分も色濃く出ていてとてもよかった。その上で３点意見がある。１つ目は、２つの番組は放送日が近いにもかかわらず、同じ内容の部分が多かったこと。制作部署で連携を取り、内容が重ならないように出来ればよかった。２つ目は、「パラ×ドキッ！」のベテラン選手が若い選手の悩みに答えるコーナーで、「車いすで体育館を使うにはどうしたらよいか」という若い選手の悩みに対して、ベテラン選手の回答があまりかみ合っていない印象があったのは残念だった。３つ目は要望なのだが、「パラ×ドキッ！」はお笑い芸人の千鳥や渡辺直美さんを起用するなど制作に非常に力を入れていると思う。「ハートネットＴＶ」も含めて、それぞ

れＢＳとＥテレで放送したものをもう一度総合テレビで放送し、より多くの視聴者に見てもらえるよう検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

「ハートネットＴＶ」と「パラ×ドキッ！」について、同じテーマを取り上げるのであれば連携した方がよいという指摘はそのとおりだと思う。総合の番組との連動も今後検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの中でもオリンピック・パラリンピックの競技、アスリートへの取材は情報交換を密にしていかなければならないと考えている。

（ＮＨＫ側）

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックを総合的にどう伝えるのかについては、さまざまな部局が集まって議論している。頂いた意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

○　４月１４日(日)のもう一度見たい！平成のスポーツ中継　第１回「夏のオリンピック」（前編・後編）（ＢＳ１　後 7:00～7:55、8:00～8:50)を見た。アテネオリンピックの体操男子団体２８年ぶりの金メダルとシドニーオリンピックで高橋尚子さんが女子陸上で初めての金メダルに輝いた２つを取り上げていた。名勝負を振り返る番組は今まで数多くあり、ハイライトで振り返ったり、脚色して違う形で盛り上げたりする番組も多いが、この番組は２種目を１時間４５分の中で、当時の勝負の緊迫感、駆け引き、息づかい、心の動きを実際に今やっているのでないかというような臨場感で伝えていた。改めてスポーツのすばらしさを家族と一緒に感じた。東京オリンピック・パラリンピックまでさまざまな競技に興味を持ってもらえるようなスポーツ番組をたくさん放送してほしい。

○　４月１日に発表された新元号のニュースは国民の関心が非常に高かった。新元号については、決定の過程や、政治の対応など多くの論点があったと思うが、元号が発表された直後の報道については、大きな疑問を抱いた。ニュースでは、菅官房長官が新元号を発表した会見を生中継で伝えた後、スタジオで政治担当記者がコメントし、続いて歴史学者がどのような考えを持つかという感想を述べていた。視聴者は新元号が何であるかについて関心を持っているわけで、発表直後は、発表内容について事実を

もう一度詳しく報じてもらいたかったと思う。また、国民生活、カレンダー、コンピューターの問題などを考えれば、元号がもっと早く発表されてもよかったのではないかという論点もあった。「ニュース７」、「ニュースウオッチ９」ではその事実が紹介されていなかったように見受けられたのは残念だった。

（ＮＨＫ側）

新元号の発表時期については指摘の点も踏まえて、さまざまな論点で去年から報道してきた。指摘は現場にも伝え、今後の元号に関する報道全体に生かしたいと思う。

○　４月２日は国連が定めた「世界自閉症啓発デー」で、全国各局が各地の情報を基に制作し放送していた。全部は見ていないが、一つの情報を単に拡散するのでなく、各放送局が独自の番組を作っていて広がりを感じた。また、報道の仕方も、ただの告知的な伝え方ではなく、ＮＨＫが昨年１１月に行った発達障害キャンペーンなどの影響を踏まえた内容になっていて、報道の仕方、内容が工夫され、ずいぶん変わったと思った。

（ＮＨＫ側）

発達障害キャンペーン、防災など、今年度以降も公共メディアとして取り組めることは集中的に展開することで、皆さんに考えていただく機会を増やしたいと思っている。

○　連続テレビ小説「なつぞら」は、農林水産省がホームページで取り上げるなど、影響力の大きさを感じる。ＮＨＫは他にも、「食料フォーラム」、「日本農業賞」、「梅沢富美男と東野幸治のまんぷく農家メシ！」などで積極的に農業を取り上げている。今後も、農業、農村の情報を多くの人たちに伝える番組を制作してほしい。

○　「ららら♪クラシック」は、初心者から通まで楽しめる作りになっている。１回に作曲家を１人取り上げるが、その作曲家について専門家に匹敵するような知識に基づいて番組が制作されていることに感心している。引き続きこうした質の高い番組を制作してほしい。

○　Ｅテレの朝９時までの番組のキャスティングが一新され、フレッシュ感が増し、期待が高まっている。

○　テレビは情報を得たり、教養を身につけたりする手段でもあるが、“癒やし”の

役割もあると思う。「世界はほしいモノにあふれてる～旅するバイヤー　極上リスト～」は、インテリア、お菓子など、バイヤーが世界でいろいろなものを探し、日本に持ってきているのを紹介する番組だが、ゆったりとした雰囲気の中で、アンティーク製品はこうやって日本に来るのか、といったことを知ることが出来て大変よい。夜のほっとした時間にこういう番組を見ると癒される。また、火野正平さんの「にっぽん縦断　こころ旅」は朝のすがすがしい時間に一日の始まりにふさわしく、自然の中で躍動感を感じさせる番組で、「今日一日がんばろう」という気持ちにさせられる。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局